平成狸合戦ぽんぽこ（ガチ）

公家麻呂

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

狸「狸だって、狐だって、動物はみんな生きてんだよ！」

平成狸合戦ぽんぽこを見て、人間に一方的にやられる姿を見て、人間に対する憎しみが募ったので書いた。

狸「もっと、ガチで人間と戦ってみることにした。」

稚拙な文ですが、感想をくれると嬉しいです。

完結するカナー。

東方要素は薄めにする予定、あくまで予定変更有。

目次

00話　消えた池　1
01話　人間と鉄のお化け　4
02話　殺処分場　7
03話　別れと出会い　12
04話　化け狐　17
05話　鈴ヶ森にて　21
06話　族長会議　24
07話　窃盗　27
08話　義男の仕置き　32
09話　反撃　その1　35
10話　反撃　その2　40
11話　藤野狸連携　46
12話　停滞　50
13話　藤野狸決起　54
14話　邂逅　58
15話　妖怪大作戦　63
16話　それぞれの…　68
17話　二代目陰神刑部継承　72
18話　はじまり　76
19話　進軍　80
20話　燃焼　84
21話　希望絶たれる　88
22話　警視庁陥落、しかし　95

００話　消えた池

やあ。
僕の名前は義男、馬引沢に住む子狸さ。
人間で言うと少年って感じかな？

「おい！義男！行くぞ！」
「光夫！待ってくれよ!!」
僕らは馬引沢の緑の中を駆け回っていた。
こいつは光夫、この馬引沢で生まれた仲間なんだ。
今も小さい子狸だけど、こいつとは寝倉が近くて赤ちゃんだったころからの友達なんだ。
これから、近所の池で鮒とか鯉とかを捕まえて食べるんだ。
「遅いぞ！義男！これじゃあ、他のやつらに先越されちゃうぜ！」
「わかってるよ!!」
僕らが池の近くまで行くと、どうも様子がおかしい。
僕たちと同じような考えを持った狸たちがいたようで数匹の集団で池が見える茂みに隠れて様子を伺っていた。
「なんだろう？義男、聞いてみろよ。」
「うん、わかった。おーい？みんなぁ、どうしたんだい？」

「ん？あぁ、義男に光夫？北の小字（こあざ）の連中か。」
こいつは薬王寺の辰吉、このあたりを仕切っている若狸なんだ。
このあたりじゃ、偉い狸なんだけど。最近代替わりしたばっかりだし、代替わりする前は僕たちとよくネズミ捕りなんかしてたし、敬語を使うのはなんか違うなってね。
「辰吉っあん。何があったんだ？」
「あれ見て見ろよ。今朝から人間が、池の周りでなんかしてて近寄れねぇ。最近、農家のジジババがいなくって新鮮な野菜がありつけねえから、池に来たってのによぉ。」
辰吉が未練たらたらの様子で、恨みがましそうに人間たちに視線を

向ける。
「ちぇっ、仕方ねえな。川の方まで行ってみっか。」
光夫が、そう言って踵を返す。僕もそれに続こうとした時だった。
池を見ていた仲間の狸たちが騒ぎ出した。
「い、池の水が減ってるぞ!!」
「なんだって!!うわぁあああ、何てことすんだ!!」
「これじゃあ、鮒も鯉も捕れねえぞ!?」

そうして、僕らが騒いでいるうちに池の水がどんどん無くなっていき、遂にはすっからかんになってしまった。
そして、今度は人間たちが大きな口を開けた蛇のようなものを持って来て、池のあったところに置く。すると蛇の口からどんどん灰色のどろどろした泥のようなものが出てくる。
「うぇえ!?気持ち悪いな。」
光夫はそんなことを言っているけど、本当に人間たちは何をやってるんだろう?
池の魚を独り占めしに来たんじゃないのかな?
「あれ、あいつ何やってんだ?」
辰吉の声で、ぼくもそっちの方を見ると本村小字の作助が人間の方にしっぽを振りながら近寄っていく。
すると、人間は作助に握り飯を放り投げて、それを作助は咥えて戻ってくる。
「握り飯もらっちまった♪さてさて、具はなんだ?お!?こいつは当りだ!鮭じゃねえか!!」
そう言って、僕たちが羨ましそうによだれを垂らしながら、見ていたら…。
「なんでぇ、おめえらももらって来りゃいいじゃねえか!人間なんてしっぽ振って近寄れば猟師じゃなきゃ、結構食いもんくれんだぜ。」
マジか…。
「俺らも行くか?」
「おう!おらは焼き鱈子が食いてえな!」

「なら、おれは昆布の佃煮だ！」
他の狸たちも作助に倣って人間たちから何かしらの食べ物をもらう。
僕も鶏のから揚げをもらった。大当たりだ。
そうやって、人間たちからおこぼれを頂戴していたら時間が経って人間たちは帰ってしまった。

「ふう、食った食った。」
辰吉や光夫たちは腹をなでおろしていた。
でも、僕はそれ以上に池の灰色の泥がカッチカチに固まって周りが更地になってしまったことが気になったんだ。
「ねぇ、光夫。池なくなっちまったな。」
「仕方ねえ、次は他の池にも行ってみっかなー。」
思い返してみたら、これが始まりだったんだ。

01話　人間と鉄のお化け

池の水が灰色の泥で固められた。
馬引沢ではたくさんの異変が起こり始めた。
農家のじいさんたちが一人、また一人といなくなっていった。
「妖怪にくわれたんじゃねぇか？」
「鉄の荷車でどこかに行ったのを見たぞぉ？」
とにかく誰もいないもんで、誰もいない農村はありがたく僕らで使わせてもらうことにした。
「おーい！義男！湯加減がぬるいぞ!!」
「作助に頼めよ!!あいつが当番だよぉ!!」
「そっか！わかった!!作助!!作助!!」
そんな話を聞きながら、僕は台所の窯に薪をくべる。
火打石どこにあったかな？
僕らは廃村を、そのまま使わせてもらうことにした。

そんな、ある日。
一台の車が止まる。
車の側部には山川建設と書かれていた。
そこから、２人の人間が下りてくる。
「ここが建設予定地か。」
「ここは、電化設備を使ってる家が少ないが、漏電やガス漏れには注意しろよ。」
「わかりました。」

物影から、様子をうかがう僕たち。
「なんだぁ？あの人間はぁ？」
作助が不思議そうに人間たちを見つめている。
僕らも、作助と同じでなんで人間が来たかはわからない。
だけど、辰吉はわかったみたいだ。

「あいつらは、ケンチクギョウシャて言って、家を新しく作り直したりするんだぜ！ほら、あの村長の家は壁のボタンを押すだけでお湯沸かしたり、火がついたりするだろ。あれを作った連中の仲間だ。」
「マジか!?じゃあ、他の家もあんな風にしてもらえるのか!?」
「うわぁ、そやうれしいじゃないか。楽しみだね。」
「あぁ、義男。俺たちも長老や辰吉みたいな豪華な家でくらせるぞ!!」
この時は、僕も光夫も作助も、辰吉の若親分も長老たちも、そう思っていたんだ。
でも、違ったんだ。

村が豪華になると思ってた僕らは、村唯一の土壁じゃない石の家である村役場でどんちゃん騒ぎさ。
昨日も、農家のじいさんたちが置いていった日本酒の残りを引っ張り出して、飲んで歌っての大騒ぎ、ちょっと頭が痛い。
二日酔いなのか、ちょっと痛む頭を押さえて、役場の外に出ると、とんでもない光景が広がっていた。
村が、鉄の化け物に壊されている最中だったんだ。
「うわぁあああ!!みんなぁ!!起きろ!!大変だぁ!!」

僕の声を聴いて、他の狸たちも集まってくる。
「な、なんだぁ!?」
「あわわわわわわ。」
周りの家や蔵が破壊されていく。
移住してから日が浅い場所だけど、自分たちの住処が無残に破壊されていくのは、みんなにとっても衝撃だったんだと思う。
腰を抜かしていたり、茫然としていたりしているのもいた。
僕も、その中の一人で叫んだあとは周りの言葉が全く聞こえなかった。
「義男！光夫！作助！みんな!!沢の奥に逃げるぞ!!」
辰吉の大きな声が、僕を現実に引き戻してくれた。
「おい！しっかりしろ!!義男!!逃げるんだよ!!」

僕よりも先に正気に戻った光夫が、僕の手を引いて沢の奥へと進んでいく。

辰吉を先頭に沢の奥へと身を隠し人間をやり過ごそうとした。

でも、人間たちは回転する刃物を持って、木々や茂みを刈り倒しながら沢の奥までやってきたんだ。

０２話　殺処分場

沢の奥へと逃げ込んだ僕たち。僕たち以外の狸たちも多くが、ここに逃げ込んできていた。

辰吉や長老たちを中心とした会議が開かれたが、彼らの会議の結果が出る前に、人間たちは木々を切り倒し、沢を埋め立てながらやってきた。

「馬引沢を出て、無事な地域に移住するしかないか。」

１匹の長老狸の言葉に、その場にいた他の狸たちも従い馬引沢の狸たちの大移動が始まった。

街の中を３０を超える狸の集団が通過するのはさすがに無理があったのだ。

僕たちは街に出ると、オマワリとかヤクバショクインとかリョウユウカイとか言う人間たちに包囲されてしまった。

「ネット！ネット張れ!!」

「逃げたぞ!!追え！追え!!」

「ようし！このまま追い込め!!」

人間たちが僕たちを追いかけまわしてくる。

「うわわわわわ!!」

「ちくしょー！俺たちが何したってんだ!!」

僕たちは逃げ回った。ゴミバケツを倒したり、形が整った茂みに隠れてみたり、木に登ったりもした。

「なんなんだよー!!」

「お前ら待て!!」

辰吉が叫んだ。

開けた場所に逃げ出した作助たちだった。

作助と他数匹の狸たちが逃げた先は車道と言って、作助を殺したのは車と言うのだと知ったのはだいぶ先の話だった。

開けたところに出た作助は、鉄の箱に体当たりをされて死んでしまった。

一瞬だった。叫び声をあげることも、最後の言葉を聞くこともできなかった。
本当に数回、口をパクパクさせて死んだ。何を言っていたかはわからなかった。
体の中身が飛び出して、悲惨な状態だった。
長老たちは、腰を抜かしてその場にへたり込み。
辰吉達は、暴れていたけどヤクバショクインの刺又で抑え込まれていた。

そして、僕も人間たちに掴まって袋の中に閉じ込められてしまった。

次に目を覚ました場所は、檻の中だった。

「な、なんだここは？」
「俺たちどうなっちまうんだ？」
「おっ母ぁ、こぇぇぇよぉ。助けてくれ～」
周りの仲間たちは恐怖で泣き叫んでいた。
少し離れたところで、辰吉と長老たちが向かい側の猫たちが閉じ込められている檻の方に向かって何やらはしているのが見えた。
確か猫の中には、少ないけど僕らのように化け学に通じ、言葉を話せる者たちもいるって言いう話を聞いたことがあった。
向こうに、猫又がいるのかな？
そう聞こうと思って、辰吉たちの方に向かって歩き出した。
だが、その前に辰吉たちが、がっくりとその場に崩れ落ちた。
「辰吉！長老!?」
僕の声に反応した、仲間たちは長老や辰吉の周りに駆け寄る。
僕は辰吉に寄り添う。
「辰吉、いったい何があったんだい？光夫は？それに他のみんなは!?ここにいる仲間以外にもいっぱいいただろ？」
「たぶん……死んだ。」

僕の問いに、辰吉は力なく答える。
「そ、そんな。」
「ここは、処刑場なんだってよ。あっちの猫に聞いた。」
「ね、猫のやつが嘘ついてるんだよ!?嘘ついて僕らをからかってるんだ!」
僕は一抹の希望を抱いてそう言い放ったが、周りを見て一抹の希望も消え失せる。
向かいの猫の檻も、隣の犬の檻も辰吉のようにすべてをあきらめて茫然自失とするもの、狂ったように泣き叫ぶものたちしかいなかった。
解ってたんだ、予感はしてたんだ。周りの雰囲気で、ここがどんな場所で、僕たちがどうなるかは…。ただただ、怖かった。今も怖い。
「気持ちはわかるけど、もうどうにもならないんだよ。」
向かいの、猫の檻からそんな声が聞こえる。
親しかった作助の惨い死を目の当たりにし、親友の光夫の死を知り、僕は気力を失った。
立つことをやめて、その場に寝そべった。
次の日、辰吉と長老たちが連れていかれた。
帰ってこなかった。
その次の日、仲間たちの何匹かが連れていかれた。
帰ってこなかった。
その日の午後、向かいの猫が連れて行かれた。
僕たちと話した猫だった。
帰ってこなかった。
その次の日は、犬たちが連れていかれていった。
いやだいやだと泣きながら吠えていた。可哀そうだと思ったけれど、明日は我が身と思ったら、怖くなった。
彼らも帰ってこなかった。
次の日も、また次の日も誰かが連れて行かれた。
やっぱり誰も帰ってこなかった。
そして、数えることをやめて何日経ったかわからないけど。

遂に僕の番が来た。
僕らが最後狸らしい。
僕たちと犬たちと猫たちが同じ部屋に放りこまれる。
何もかもをあきらめて静かに座り込むもの、恐怖におびえ泣き叫ぶもの。
僕は、前者に近かった諦めの境地とでもいうのだろうか。自分が自分じゃないような、僕を誰かが離れたところから見ているようで、その誰かが僕なような不思議な感じだ。自分の事とは思えない、そんな感じだ。
良くはわからない。でも、一匹また一匹と泣き叫ぶ声が減っていく。
犬も猫も狸も、みんな静かになっていく。
目の前で倒れたあの狸は、たまに野ネズミの狩場が重なって光夫たちとよくケンカした奴だった。
そのそばに倒れてる猫は、しゃべれる猫じゃなかったけど、僕らより前に死んだしゃべれる猫の番いだったらしい。よく目が合った。
後その隣の狸は、最初に埋められた池で初めて会って、代わりの魚の狩場を教えてくれたいい奴だった。名前を聞くのを忘れてたなぁ。
僕の体に寄りかかってくる奴がいる。
どこの誰かは知らないけど。背中が少し黒い茶色い毛並みをした子犬だった。
僕は最後に顔を上げる。
人間が透明な壁の向こうにいた。
あいつらは楽しんで僕らを殺しているのだろうか？笑ってない、違うか。
じゃあ、命を奪うことに悲しんでる？泣いてない、これも違う。
何か恨まれることを僕らはしたのだろうか？怒ってる顔でもない。
じゃあ、なんで…。僕らは殺されなきゃいけないんだ。
なんで、僕らは死ななきゃならない。
ぼくらは、死にたくない。死にたくないよ！

そりゃたまには、農家のところから作物を盗んだりしたこともあるよ！

でも、殺されるほどの事か！あいつら、たまに余った野菜を小さな鉄の荷車で潰してたじゃないか！捨てるほどあるものを盗ったからって、そこまでされるほどの事かよ!!

お前たちは！お前たちは!!僕らから住むところも、食べるものも全部奪ったじゃないか!!それでも足りないのかよ!!僕らの命まで欲しいのかよ!!

なんで！どうして！そこまで欲しがる！お前たちは何が欲しいんだ!!

森を切り刻んで…、山を削って……、川を埋めて何が欲しいんだ!!

０３話　別れと出会い

僕は静かにこの光景を目に焼き付けて、静かに死んでいった。
そう、死んだと思ったんだ。
でも、僕はまた目を覚ますことが出来たんだ。
真っ暗だ。
ひんやりとした冷たいものとぶつかる。
とにかく出なきゃ、ここから出なきゃ。
とにかく暴れまわると、外に出ることができた。
僕は振り返る。
黒い袋が無造作に山積みにされている。
この黒い袋は人間がいらなくなったものや食べ残しが入っている袋だ。
馬引沢で見たことがあるぞ。
人間にとってはゴミかもしれないけど、エビの尻尾やあんこカスがあったりして僕らにとってはごちそうだ。ちょっと、おなかも減ったし取り合えずなにか…。
おや、僕のほかにも出れた奴がいるみたいだ。
「ねぇ、起き…て…、冷たい死んでる。」
じゃあ、その隣のやつも…。
やっぱり、死んでる。
ゴミの袋の山。
僕と一緒に出てきた亡骸。

僕はどこから出てきた？
身の毛がよだつゾワリとした感覚。
考えたくなかった。見るべきではなかった。
でも、僕は、僕の体は勝手に動いた。僕の歯が近くにあった袋を破る。

仲間の死体があった。
じゃあ、この山は…。
そんな、悍ましいことを考えちゃいけない！あっちゃいけないんだ!!
僕は、狂ったように袋を開けていく。
嘘だ！嘘だ！これは夢だ！こんなことあっちゃいけない!!
こんな、こんな馬鹿なこと!!こんな、こんなことって…。
「い、いやだ。うそだぁあああああああ!!」
気が付けば、半化けの状態だった。
僕の周りには死体死体死体死体死体。幼い死体、若い死体、壮年の死体、年老いた死体。
知ってる奴の死体、知らない奴の死体。辰吉の死体、光夫の死体、長老の死体。
狸の死体、犬の死体、猫の死体。
「ああああ!!ああああ!!ああああああああ!!」
あああああああああああああああああああああああああああ!!!
「な、なんで。なんで、あの中にみ、光夫や辰吉が!?」
僕は頭の中が真っ白になる。真っ白の頭の中で必死に考える。
「だ、だって。あ、あの袋はゴミを入れる袋だぞ!?」
なんで、あの中に入ってるんだ俺たちは!?ゴミを入れる袋に!?
ゴミ、ゴミ、ゴミ!?
俺たちは、俺たちはゴミなのか!?俺たちはゴミなのか!!俺たちはゴミなのか!!!
辰吉の若親分が、親友の光夫がゴミなのか!?
あの物知りな長老がゴミなのか!?食い意地が張ってたけど、根はやさしい作助はゴミなのか!?長老たちが殺されて、落ち込んだ僕に気を使って声をかけてきたあの猫又もゴミなのか!?狸も犬も猫もゴミな

のか!?ゴミなのか!?ゴミなのか!?ゴミなのか!?
違う。
違う、違う。
違う、違う、違う。
「違う!!違う!!違う!!ゴミじゃない!!ご、ゴミじゃない!!ゴミじゃない!!俺たちはゴミじゃない!!ゴミじゃあないんだ!!!!!」
「うるさいぞ!!今、何時だと!?おも…って…。」
扉の向こうから人間が出てくる。人間、人間、にんげん、ニンゲン…!!
お前たちはいったい何様のつもりなんだ!!俺たちは、俺たちは!!
僕の胸の中で抑えきれない何かが突き動かす。
「俺たちは狸だ!!俺たちは生き物なんだよぉおおおおおお!!!」
僕は大きな石を片手に人間に向かって走り出す。
「俺たちはゴミじゃない!!生き物なんだ!!くそ!!ふざけやがって!!ちくしょう!!」
僕の手に持った大きな石が人間の頭に吸い込まれる。
何度も、何度も。
僕が冷静になって手を止めたのは、人間の頭が無くなるほどに殴りつけた頃だった。
「お前たちの方が、よっぽどゴミじゃないか…。」
僕は、馬乗りになった人間から降りる。
「どこか、森のある所に帰ろう。ここにはいたくない。」
僕は、ふらりと一歩踏み出す。
「ケホッ」
誰かがむせこむ声がした。
振り返ると、よたよたとおぼつかない足取りで、僕の方によって来る子犬がいた。
よく見ると、子犬はあの部屋で僕に寄りかかってきた子犬だった。
「君は、あの時の僕の影に入って助かったのかな?それにしてもこんなに近くにいたのに気が付かなかったなんて…。影の方にいたのか

な？」
僕は子犬を一瞥から再び死体の山に目を向ける。
子犬は僕の足元にすり寄って来た。
「君も一緒に来るかい？そうだな、鈴ヶ森の方にでも行こうかなあそこは山の奥の方だし安全だからね。あぁ、そうだった。光夫や辰吉の若親分たちに、他のみんなも連れて行ってあげあきゃ…。」
僕は辰吉の若親分や光夫たちを抱えようとする。背負う形で連れて行こうとしたが一歩歩くたびに誰かが落ちてしまう。
「おいおい。みんなしっかり捕まってくれよ。これじゃあ…連れて…いけないよ。」
鈴ヶ森にはみんなで行くって言ったじゃないか。
それに、ここで世話になった猫たちや知り合った犬たちにも鈴ヶ森で一緒に楽しく暮らしたかったんだ。
「どうして、どうして、みんな死んじまったんだよぉおお。馬引沢の狸が俺一人になっちまったよぉおお!!寂しいじゃないか！一人にしないでくれよ!!俺を独りにしないでくれよ!!光夫！お前に引っ張ってもらわなきゃ、俺は飯の場所すらわかんねぇんだよ!!辰吉!!長老!!あんたたちがいなきゃ、俺たち馬引沢の狸はどうすればいいかわかんねんだよ!!うぅうううう…。み、みんなぁ…。」
涙を流す僕の顔を子犬が舐めてくる。
わかってる。わかってるんだ。死んだ奴をどうにかできるわけがないことぐらい。
「慰めてくれるのかい。お前はやさしいな……。そうか、お前も独りぼっちだな、俺より小さいくせに…。お前も俺と一緒に鈴ヶ森に行くか。」
「くぅうん。」
子犬は弱々しい声で鳴き声を出す。
僕にはそれが肯定の意に感じられた。
僕は、子犬を抱き上げる。

同じ、処刑場にいて同じく生き残ったこいつに僕は親近感を感じたんだ。
だから、こいつも一緒に…。
「一緒に行くなら名前が欲しいな。そうだなぁ、影の方にいたから影。お前の名前は影だ！」

０４話　化け狐

サツショブンジョウとか言うあの地獄から逃げ出して、早三か月。
僕と影は、未だに鈴ヶ森にたどり着けずにいた。
やっぱり、この人間の世界でたくさんの狸で大移動をしたのは失敗だったと、僕は改めて理解した。
僕と影程度なら人間たちは基本無視する。
僕と影は、細く薄暗い場所のゴミ捨て場で人間の食べ残しを食べたり、そこにいるネズミなんかを捕まえて飢えをしのいでいた。
鈴ヶ森に向かうことも、考えていたが今は生きるだけで精いっぱいだった。
運が悪いとヤクバショクインやオマワリがやってくることもあるので注意が必要だったんだ。
でも、最近はこの問題も何とかなりそうではあった。僕の独学変化術もだいぶ形になってきており、最近は人間に化けることもできるようになった。たまに、尻尾が消えない時があるけど、そこは挟んだりして誤魔化す。
「どうだい？影？なかなかのもんだろ？」
そう言って僕は人間のサラリーマンに化ける。
「ウン、イイトオモウヨ。」
最近は影も僕らほどではないが、カタコトで会話できるようになってきた。
化け学の影響なのか、犬の影にも影響が出ているようだ。
正直、影が話せるようになって僕は嬉しかった。
寂しい思いをすることもなくなったから。
「今日は、なにを食べようか？あの裏なら肉の切れ端がありそうだけど。向い通の路地なら魚が手に入るよ！」
僕の背後で足音が聞こえた。
僕は慌てて振り返る。
「おや、こんなところに狸とは珍しいですね。」

人間が後ろに立っていた。
見られた。まずいまずいぞ。
「ま、待ってください!!狐!狐ですよ!私は!!」
人間?と思っていた彼であったが、変化を半分解いた半化けの状態になった姿を現した。
「君は狐なのか!?久しぶりに会った。」
僕も、半化けになって応じる。
「君は、化け学にも通じているのか。そういえば……君は馬引沢の狸か。」
「あぁ、そうだよ。」
狐は僕の後ろにいる影の方にも視線を向ける。
「ヨシオ…。」
影は僕の後ろに隠れる。
「この犬は…。」
「処刑場で拾った。」
狐は眉間に少ししわを寄せてから口を開く。
「処刑場…、殺処分場…。まさか、君は…。かなり若い狸と子犬がいると思って声をかけたが…。その年で半化けにまでなれるのか。」
狐は険しい表情のまま尋ねる。
「妖怪化してるのか。」
「妖怪化?」
狐は、踵を返す。
「目的地はどこかな?送っていくよ。君の様なのが、こっちにいるべきじゃないよ。」
僕と影は、狐についていく。
彼についていくと、人間たちが乗っている鉄の箱があった。
僕らが、たじろいでいると狐が話しかけてくる。
「車っていうんですよ。人間たちの乗り物ですよ。昔で言う馬ですね。とにかく乗ってください。」
僕らは、狐に促されるまま車に乗せられる。
「で、目的地は鈴ヶ森ですか?鷹ヶ森ですか?それとも、藤野町?あ、

御料牧場はお勧めしませんよ。あそこは空港建設の話が上がって安全とは言えなくなってきましたし、といってもどこも似たようなものか。いっそのこと東北や北陸の方にでも？」
「あ、えと、鈴ヶ森に行くつもりだったんだ。それに、僕の故郷は馬引沢なんだ。あんまり離れたくない。」
「君たち名前は？」
「僕は義男、こっちは影って言うんだ。」
「そうか。じゃあ義男に影、鈴ヶ森のそばまで送るよ。そうだ、名乗り忘れていたけど私は堀之内の竜太郎。竜太郎とでも呼んでください。」
竜太郎の運転する車が街の中を通過していく。
いくつもの石塔、これはビルとか言うらしいを通過して、長い距離を走っていく。
竜太郎とはいくつか他愛のない会話をしたが、僕としてはあまり覚えていないけど竜太郎としては興味深かったらしい。
長い距離のはずなのだが、この車と言う奴はとても速くて、昔聞いた鈴ヶ森の地まですぐに到着してしまった。
鈴ヶ森口と書かれた場所で車を止めた竜太郎が、ドアを開ける。
「つきましたよ。…しかし、すごいですね人間は、私たちなら1日2日はかかる距離をたったこれだけの時間で踏破できるようにしたのですから。あなたは他の狸とは違うような気がします。ですが、それでも人間は強大です。あなた方、狸も狐のように人間にまぎれてみるのもよいかもしれませんよ。」
竜太郎は親切心で言ったのだろうけど、僕は竜太郎のその態度が気に入らなかった。
何もかもあきらめた態度が…
「竜太郎、人間は人間だ。狸は狸、狐は狐、犬は犬、猫は猫。僕らは人間にはなれないよ。」
「私たちは人間には勝てませんよ。」
「でも、自分を捨ててまで、やることなのかな？」
「さぁ？私にはわかりませんよ。そんな事…、堀之内が駅になって鉄

道が通るようになってからは考える気にもなりませんでしたよ。そしてこれからも、狐の誇りを捨ててまで生に執着したのです。今更変えられませんよ。さぁ、行ってください。あの通りの先は全部鈴ケ森ですから…。」
「ありがとう、竜太郎。」
「礼には及びませんよ。プライベートな愚痴をこぼしたくなっただけの事ですよ。では、私はここで…。」
「マタネ、リュウタロウ…。」
僕の隣にいた影が、竜太郎に礼を言う。
竜太郎は片手で手を振ってから車に乗り込み、そのまま去っていった。

僕と影も車が見えなくなるまで、手を振っていた。

義男たちと別れた日の夜、竜太郎は自宅のマンションに帰る。
竜太郎は、人間のように風呂でシャワー浴びて、人間のようにレンジで即席の料理を作り、人間のようにＴＶを見ながらご飯を食べる。
「どんなに、人間を真似ようと…わたしも彼と一緒だ。故郷から離れることはできない。」
竜太郎はマンションのベランダに立つ。マンションから見える範囲にある堀之内駅を見下ろす。
「結局は、私も彼と同じか。あぁ、昔に戻りたいなぁ。……考えるだけ無駄だな、寝るか。」

０５話　鈴ケ森にて

竜太郎の運転する車から降りて、鈴ケ森入り口と書かれた看板の先に足を踏み入れ、歩みを進める。
しばらく、歩けば車の音は完全に聞こえなくなり、風の音や沢の音が聞こえてくる。
影も僕の後ろをついて歩いてくる。
そんな僕らに、後ろから声がかかる。
数匹の狸の集団が僕らの後ろにいた。
「おい！おめぇ、このあたりのもんじゃねえな？どこの狸だ？しかも、山犬なんて連れて!?青左衛門のところの奴か？」
「いや、しらんぞ。あんた？どこのもんだ？鷹ケ森の権太の言う通り、この辺のもんじゃねぇよな？どこのもんだ？」
「ぼ、僕は馬引沢北小字の義男って言います。こいつはここに来る途中で仲良くなった犬の影って言います。」
「お、おめぇ!!馬引沢の生き残りか!!馬引沢の話は俺たちも聞いているぞ!!大変だったな!!」
「おい、権太。とりあえず、こいつの事は鶴亀和尚とおろく婆に任せよう。最近はよそ者も増えてきたからな…。」
すると、青左衛門と呼ばれる狸が僕に話しかけてきた。
「俺は、この鈴ケ森を取り仕切っているもんだ。こいつは隣の鷹ケ森を仕切っている権太って言うんだが…。俺たちは、これから多摩丘陵一帯の顔役である鶴亀和尚とおろく婆さんに用事があって会いに行くところだったんだ。よそから来た奴はみんな二人には挨拶しておくもんなんだ。ちょうどいいから一緒に行かないか？権太も構わんだろ？」
「あぁ、俺は構わんぞ。」
「どうもありがとうございます。ご一緒させてください、僕はこの辺

りは初めてなのでお二人のような方とご一緒出来てありがたいです。ほら、影もお礼言って。」
　僕は、僕の後ろに隠れている影に促す。
　影は僕の影から出て来る。
「オジサンタチ、ドウモアリガトウ。」
　影は、僕と同じ半化けの状態になる
「お！こりゃ珍しい!!犬の化け学使いとは!?」
「あぁ、俺もガキの頃に一度見たきりだぜ。」
　青左衛門と権太は珍しそうに影の方を見ると、影はまた僕の後ろに隠れてしまった。
「ヨシオノマネシタ。ガンバッタ。」
　あの地獄を生き残った影響なのだろうか？
　影は、他の犬とは少し違う気がする。
　でも、とにかく今はこの森での自分の居場所を確保しなくては…。
　青左衛門と権太達に連れられて、僕らは森の奥の方にある古寺へと案内された。
　僕と影は古寺に案内されたが、青左衛門と権太達親分衆の会合が終わるのを待ってから鶴亀和尚とおろく婆に会えることとなったので、その間は寺の境内で待つことになった。

　親分衆の会合が終わって、僕らは寺の中のお堂に通された。
「馬引沢の話はこっちでも噂になっておる。大変であったの…」
　法衣を来た老狸が労いの言葉をかける。この狸がこのあたりの名士である鶴亀和尚だろう。
「いくらかは藤野町に逃げたという話だが、馬引沢は壊滅したと聞いておった。おぬしは数少ない生き残り、苦労したであろう。まずは、この地で腰を落ち着けて、安寧に暮らすとよい。」
　次に声をかけてきた着物姿の狸がおろく婆だと思う。和尚よりも偉そうな気がする。
「ありがとうございます。僕らも、これで…うぅ…やっと…。」
　ここに来て、その安心感からか思わず、泣き崩れてしまった。

「権太。この者たちが慣れるまで面倒見てやりな。」
「あぁ、わかった。」
権太は肩を震わす義男たちに声をかける。
「いつまで泣いてるんだよ。今日の宴はお前らの歓迎会でもあるんだぞ？主役が泣いてちゃ話になんねえぜ！」
そういって、権太さんは僕の肩をバンバン叩いた。
少し痛かったけど、その親しみを込めた一撃は、僕にはすごく嬉しかったんだ。

０６話　族長会議

僕らが、権太さんの鷹ヶ森に移住して初めのうちの2・3年のうちは馬引沢時代のように平和な時を過ごしたが、そんな生活もそう長くは続かなかった。

何度目かに及ぶ餌場争いの最中、乱入したおろく婆によって見せられた。

鷹ヶ森・鈴ヶ森の禿山の姿を目にしたことにより、その争いは終わった。

人間社会において、昭和４０年あたりから全国各地で山林の無秩序な大開発が開始した。

東京都では総面積３千ヘクタール居住予定人口3万人、山を削り森を切り倒し、田畑を埋め、昔ながらの家屋敷を破壊し、多摩丘陵を完全に変貌させ巨大な造成地を作り出し、ここに巨大なベッドタウンを作り出す。大開発事業が進んでいたのである。

この緊急事態に、多摩丘陵全域の狸たちは、それぞれ一族を引き連れ、牡丹餅山万福寺の廃寺に集合した。

議長にはこの万福寺に住む１０５歳になる古狸鶴亀和尚が満場一致で推薦された。

「本来の夜行性に拘らず、昼間でも臨機応変に行動していかねばならんのじゃ。」

また、この会議において義男が、多摩丘陵開発の犠牲となった馬引沢を中心とした地域、故郷を失った狸たちの暫定的な長に就任した。

比較的若年である狸であった義男ではあったが、そういった狸の中で、都心部を縦断し生き残る。山犬の影を従える等の目に見える逸話を持っており、権太を中心とする上役狸たちの推薦もあり、これといった反対意見もなく無事就任の運びとなった。

「では、義男を長老衆の一角として迎え入れるものとする。よいかの…」

「「異議な～し。」」
大会議はこの開発阻止の大方針を決めたのち、危険を考えただちに解散。
その後に開かれる族長会議に一任されることになる。
族長会議では廃れていた化け学の復興、人間研究に5か年計画で取り組むことを宣言したのちに、四国と佐渡から有名狸を化け学指南として招聘することを決定。
だが、長距離の危険な旅に志願者はなく。全員狸寝入りを決め込んだ。
「「「「Ｚｚ～・・・・」」」」
また、議長団の議々進行において用意したマクドナルドのハンバーガーは極めて有効に働いた。
「モスの方がうまかった」
というのは義男の言である。
また、次回の長老会議ではモスバーガーのハンバーガーを購入することが決定された。
会議は長老たちの腹の一本締めで閉会した。
「「「「よおっ!!」」」」ポン!!

そして、後日…
人間研究を実り豊かなものにするものとして、万福寺の本堂にＴＶを設置することにした。
『動くな!!こいつの命が惜しくないのか!!』
『いったい何が目的だ!言うんだ!』
『逃走用のヘリコプターと逃走資金1千万用意しろ!』
義男はテレビのリモコンをいじる。
『本日、東京銀座の洋品店に何者かが侵入し、現金１２０万円が盗みだされると言う…』
義男の背後から不意にかかる声、権太のものである。

「おい、義男。お前、またテレビを見てるのか？と言っても他の連中も似たようなもんか。」
　そう言って、ＴＶ番でもないのにＴＶを見ている狸たちに睨みを利かせる。
「まあ、いいじゃないか。彼らも勉強してるんだ…人間研究には違いないさ。」

０７話　窃盗

狸たちが化け学復興と人間研究に時間を費やしている一方で、人間たちの開発と造成は続き整地されていった。狸たちはそれを怒りと悲しみを込めてのっぺら丘と呼んだ

そして、化学の講義が進んでいき実践、いわゆる人間の町での実習が行われた。

この実習では、狸たちの中で人間の町で暮らしたことがある義男が模範生として教師役の狸たちの補佐に回った。

の狸たちの補佐に回った。

義男は長老衆の中では若年であり末席にあったが、人間社会を知る狸として教える側に回ることも多々あった。

「佐助、車を見るとすぐに背筋が凍り付くみたいだね。でも、車の通る道で立ち止まったらだめだ。車にひかれてしまうよ。」

「すいません、義男さん。」

義男は、横断歩道の真ん中で腰が引けている佐助の襟首を引っ張り渡る。

佐助はこの鈴ヶ森に住む、眼鏡をかけたインテリ風の変化狸だ。

そんな、佐助を抱き寄せながら無事を喜ぶ鶴亀和尚。

「義男、よく佐助を助けてくれた。礼を言いますぞ、ありがとう。」

「いえ、そんなことは…」

また、インテリ寄りではあったが行動力もあり、権太の側近的な立ち位置でもあった義男は若手狸たちの信望も篤く、めきめきと頭角を現していた。

そして、そんな義男であるが長老衆の中で良くも悪くも一目置かれるきっかけとなったのが、この街頭実習の最終試験、各自独力で１週間から１ヶ月で最低千円を平和的に集めてくるというものであった。

最終試験自体、義男はルール違反を犯し失格となるはずであったが特例扱いとされた。

義男の持ってきたお金の額は１２４万６千７００円、断トツのトツ

プであった。
義男はいかにしてこの金を手に入れたかと言えば以下のとおりである。

義男は当初からまっとうなやり方で金を手に入れるつもりはなかった。
義男はテレビなどで、比較的簡単な方法でお金を手に入れることができることを知っていた。
例えば、強盗。
銀行や商店に凶器を持って押し入り現金などを奪い取る方法。
ただこれは、実行後にオマワリの相手をしなければならなくなり面倒ごとが付いて回る。
一人で実行するとなるといろいろ準備がかかるのである。
そこで、義男が実行したのは窃盗であった。
義男は大胆にも、人間に化けて郵便局に侵入。
２時ごろの比較的混んでいる郵便局で、トイレに入りそこで掃除用具に化けシャッターが閉まるのを待つ。閉店後に事務所の方に移動して、観葉植物に化けた。
待合室の方から、事務所側を見る。
義男は郵便局の業務を、一日中眺め観察する。
５人程度の局員が、ゆったりと仕事をしている。
混んでなくても、とりあえず客を待たす。
他の仕事に比べると郵便局の業務はゆったりしている。
見るからに、抜けた連中だ。
そして、シャッターが閉まる時間になると、今度は事務所の奥の方にあるめったに使われることのない少し刃のさびた古い裁断機に化けた。
数日間をかけ事務所側から人間を観察する。
この郵便局では、日の終わりにユウビンキョクチョウがフクキョクチョウを伴って鍵の確認を行う。
この位置は扉を開けた瞬間、金庫室が見える。

キョクチョウが自分の席にあるカギを取り出し、扉の鍵を開ける。
キョクチョウがトイレから戻ってきたフクキョクチョウに声をかけ金庫室に向かう。
「どうです?今日の帰りに一杯?」
「いいですね。では、バス停の隣の店で。」
キョクチョウは金庫の番号ダイヤルを合わせて、鍵を開け中を確認して再び閉める。
そして、全ての業務が終了して局員はみな帰っていった。

そして、その翌日義男は行動を起こす。
義男は今度はトイレに潜む。
シャッターを下ろした後に用足しに現れるフクキョクチョウを待つためだ。
半日待つこと、遂にフクキョクチョウが現れる。
個室トイレに入ったのを確認し、壁つたいにフクキョクチョウの入った個室の真上に移動する。
義男は玉金袋を思いっきり膨らます。
「な、なんだ!?ぐぇぇぇぇ!?」
気絶したフクキョクチョウをそのままに、何食わぬ顔をして戻る。
「寺田くん、いつもの。」
「あ、はい。」
フクキョクチョウに化けた義男はキョクチョウについて金庫室に入る。
「最近は多摩丘陵の開発が進みましたね。」
「えぇ、そうですね。」
キョクチョウがダイヤルを合わす。
「私のように、昔から住んでいる者にとっては寺や地蔵を壊したりする今の行政のやり方は、祟りや罰がないか。少々恐ろしく思いますが、今の者たちにとっては何でもないのでしょうね。」
金庫の番号は０８３１。
「……今の人間は随分無遠慮になったのではと思います。ですが、奪

われた者たちの恨み辛みとは恐ろしいものです。いつかきっと、後悔することになるかもしれませんね。」
「寺田君？」
「いえ、別に…」
キョクチョウは一瞬、怪訝な表情を浮かべたがすぐに扉を閉めてダイヤルを崩す。
キョクチョウは金庫を閉め、金庫室の扉にカギをする。義男もそれに続き、再びトイレに戻る。
義男はフクキョクチョウに少量の水をかけてその場に隠れる。
フクキョクチョウは、混乱しつつも慌てて事務所に戻ると、すでに業務が済んでおり不思議そうにしていた。

その日の夜、義男はキョクチョウの机から鍵を出す。
出した鍵を使って、金庫室の扉を開ける。金庫のカチリとダイヤルを合わせる。
空いた金庫から見える札束を掴む。
金庫から出した金を一度、受付窓口に置いておく。
義男は、事務所を物色して紙袋を探す。
見つけ出した紙袋を二重三重にして袋を入れる。
さらに義男は物色を続け、事務所から小銭を見つける。
フィルムに包まれた円柱状小銭を紙袋に入れる。
義男は給湯室に移動し、やかんをコンロにおいて火を入れる。
冷蔵庫も開けてみる。
その途中にある休憩室のテレビをつける。
音楽番組がクラシックを流していた。
「ちゃ～♪ら～らららら～♪たったん♪たったん♪」
鼻歌を歌いつつ、事務所に戻り物色を続ける。職員のロッカーも漁っておく。
レターケースに収納された様々な金額の印紙や証紙に切手を紙袋に入れていく。
受付窓口のリスの人形ももらっておこう。

後、郵便受け取りの預かり品のダンボールを開封して中を確認していく。

「ちゃらららら～♪たったん♪たったん♪」

ピー!!

給湯室のやかんが鳴る。

少し慌てて、火を止める。

ガス代の下の棚からカップ麺を出す。

日清カップヌードルにお湯を注ぐ。

休憩室で胡坐を組んでカップ麺をすする。

うまい。これも土産にもらっておこう。

給湯室に戻り、棚から収納されている８個のカップ麺を回収する。

テレビを持って帰ろうと思ったが、重かったのであきらめる。

代わりにポットを持っていこうと思ったが、紙袋に入らないので玉露茶葉をもらっておく。

「ちゃらららら～♪らららら～ら♪」

キョクチョウの机を物色し、通用口のカギを見つける。

そして、悠々と義男は紙袋を両手に持ち通用口から外に出る。

一応鍵は閉めてから、裏口のカギをその場で投げ捨てる。

「ちゃんたったん♪」

０８話　義男の仕置き

　現金１２４万６千円７００円、収入印紙１８万４千円、収入証紙１１万７千５０円、切手９万２千６４円、ボールペン３０本、朱肉３個、鉛筆２０本、修正液５個、セロハンテープ１０個、ハサミ５個、ステックのり３本、でんぷんのり１個、たばこ２箱、マッチ箱１個、膨らませてない風船２０個、リスのマスコットの人形２個、鉛筆削り１個、消印他印鑑１０本程、食器皿２枚（小包）、図書券２万円（郵送品）、カップ麺８個、高級玉露入り緑茶葉５００グラム、缶コーヒー３本、プリン１個。これが、義男が持ち帰ったものの全てである。
　２００万近いものを持って帰ってきた義男に対して、おろく婆のように非難するもの、権太のように手を叩いて讃えるもの、鶴亀和尚のように眉は顰めつつも言葉にしないもの等、反応は様々であった。
「義男!!私は平和的にと言ったはず！なのにこれはどういうことだ!!」
　おろく婆は郵便局の窃盗事件を流すＴＶを指さす。
「おいおい、おろく婆。義男の何が悪いってんだ!?義男は俺たちにさんざん煮え湯を飲ませた人間たちに一矢報いただけじゃねえか!?」
「権太！義男を甘やかすんじゃない!!義男はやりすぎた！あまりに目に余る行為は人間たちの敵愾心を呼び起こす。義男を長老に就任させたのは早計であったか。」
「それが何だってんだ!!この程度当然の報いだ!!あいつらは俺たちの森を奪ったんだ!!義男の何が悪い!?」
　おろく婆と鷹ヶ森の権太は、馬引沢の義男の処遇を巡り激しく対立した。
「（ズズ…）おろく婆、少なくても死人は出てないんだ。わしが思うに十分平和的だと思うが？（ズゾゾ…）」
　義男の持ち帰ったカップ麺をすすりながら、発言したのは馬の背山の熊太郎であった。
「違反はあったが、それを踏まえても十分大きな功績だ。」

「うむ、抜け駆け先討ちは戦の花…。俺も義男はおとがめなしでいいと思う。」
青左衛門の言葉を皮切りに、鶴牧山の黒兵衛、一之宮の伊右衛門などの強硬派長老たちが支持を表明。
もともと、人間たちとの対決を意識していた族長衆はその度合いこそ強弱があったが義男に対しては好意的な考えを持っていた。
「まぁまぁ、皆の衆。火の玉のの言う様に規律と言うものは大切じゃ。義男にも何かの仕置きは必要じゃろう。しかしながら、義男の功績はおそらく最大のものじゃろう。ゆえに義男の長老位は一時停止し…そうじゃな。権太の補佐にでも回ってもらおうかの。義男も権太を慕っておったしの。」
今回の出来事で、強硬派と慎重派の溝が見えたのであった。
そして、後日に起きる事柄は義男の超強硬派としての片鱗を見せるものであった。
義男の謹慎期間中、義男の派閥に属する狸たちは権太の鷹ヶ森派閥に組み込まれた。
義男自体も、化学の修行に関してはすでに卒業レベルに達したとして教える側に回された。
しかし、本部付き講師補佐などと言う役職は、ほぼ名誉職で暇を持て余すことが増えていた。
ゆえに、義男は影が住まいにしている万福寺のそばにある廃屋に入り浸ることが増えていた。
「サイキンは、よくこっちにクルのね。ヨシオ?」
「あぁ、少々派閥抗争に巻き込まれてね。閑職だよ。」
影に玉露のお茶を入れてもらい。
義男はそれを受け取り、岩に腰掛ける。
茶を飲む。
「しかし、お前。なに犬なんだろうな?」
「さぁ?自分でもワカンナイ。」
「そもそも、犬なのに化学もそれなりに身に着けて、もう言葉も流暢だしなぁ。そういえば、影。お前、鶴亀和尚から苗字、もらってたよな。」

「えぇ、今泉ね。わたし、この多摩にクルマエは入間にイタノヨ。入間の今泉。」
「ふ～ん」
　反応が自分の思っていたよりも薄い義男に影は少々不満げにする。
「自分からキイテオイテキョウミなさそうなのね…。それに、あなたもだいぶ変わったように見えるわ。ムカシはもっと、びくびくしてかわいらしかったわ。」
「いろいろあったからな。変わるさ…。」
「いろいろねぇ…。」
　影は義男の隣に腰を下ろす。
　影も、以前のような片言言葉から、徐々に流暢に話すようになった。
　しばらくふたりで物思いにふけっていると、権太の部下の狸がやってきた。
「義男さん!!権太さんがお呼びです!!すぐに万福寺に来てください！長老会議が招集されました!!」
　僕の中で、何かが決定的に変わったあの事件が起きようとしていた。

０９話　反撃　その１

万福寺の本部で化学修行に励んでいた権太は、突然の知らせを受け鷹ヶ森へ舞い戻った。
自分が生まれ育った鷹ヶ森が、すでに半分以上のっぺら丘と化していたのである。
権太は怒り狂った。
直ちに本部へ取って返し、強引に鶴亀和尚に族長会議を招集させた。
そして、人間撃退作戦の発動を提案したのであった。
「俺は絶対反対だ！」「なぜだ！」
「五ヶ年計画の…、まだ一年目だぞ!?」
「俺たちは卒業試験に合格した！もうかなりの事が可能だ！」
「時期尚早なことには違いあるまい！」
これに対して、鈴ヶ森の青左衛門が反対の意見を述べ口論となっていた。
そこへ、遅れてやってきた義男が襖を勢いよく開けながら声を張り上げる。
「確かに時期尚早と言う意見もその通りだとは思います。ですが！我々は猶予期間を見誤った!!」
義男は部下の狸たちを連れてお堂に上がり込む。
「な、なにを馬鹿な!?五ヶ年計画は長老会議で決めたことだ！おぬしらも納得したではないか？」
義男の言葉に長老の一人が言い返す。
「あの時、誰が一年も掛からぬうちに鷹ヶ森の半分がのっぺら丘になることを予想できたって言うんだ！状況があの時の予想と違いすぎる！計画の修正が必要です！」
義男の言葉に義男の部下たちは握りこぶしを作って「そうだそうだ！」と賛意を示す。
「……鷹ヶ森ののっぺら丘がここまで早く広がったのは予想外じゃっ

た。何かしらの行動が必要かもしれんのぅ。火の玉の？こやつらにできると思うか？」
「うぅむ、確かに一通りのことはできるようになった。じゃが、経験が足りん。失敗して正体が露見する危険はある。」
鶴亀和尚はおろく婆と少し相談して、権太に尋ねる。
「権太に聞きたい。自分の森がやられ、腹立ちまぎれにこの作戦を提案したようだがどうじゃ？」
「誓ってそのようなことは…。」
権太の次に義男にも尋ねる。
「義男も腹立ちまぎれで権太の案に賛成しているのではないのか？」
「確かに怒りもある。ですが、それ以上に奪われるのはもうたくさんです。」
鶴亀和尚は義男とその部下たちを見る。
義男の部下たちは、馬引沢の義男同様に住処を奪われ、ここにたどり着く途中で友や家族を失った大字連光寺や永山・乞田と言った地域の流れ狸たちであった。
「とにかくみんなが反対しても、鷹ヶ森の俺たちはやる!!」
「我々、馬引沢・連光寺・聖ヶ丘・桜ヶ丘・関戸・諏訪・永山・貝取は鷹ヶ森に続きます!!」
「お二人がやるというのなら僕もやります。」
若手衆のリーダーである影森の正吉の賛同を得たことで、流れは作戦決行へと傾いていた。
鶴亀和尚は彼らの決意は固いと理解し、一応は認めることにした。
おろく婆も、彼らに秘術『死体が狐』に見える術を託して認めることにした。

数日後、鷹ヶ森の権太と馬引沢の義男を中心とする精鋭有志４３名は、身に着けたばかりの変化術を巧みに使い人間に対する決死の奇襲作戦を開始した。

第一の策は、連光寺の助六の部隊による偽橋作戦である。

交通整理員に化けた狸によってトラックなどの大型車両を崖に誘導し、玉袋でできた見かけだけの橋を渡ろうとした瞬間に変化を解き、崖の下へ車両を叩き落したのであった。
第二の策は、義男の部隊による倒木作戦で、車両を押しつぶしたり、ハンドル操作を誤らせて崖への転落事故を誘発するなどの戦果をもたらした。
そして、第三の策は権太ら最精鋭による車への取り付き。直接攻撃であった。
遂に、狸たちの反撃が始まったのである。

『今日午後二時半ごろ、多摩市のニュータウン建設予定地で土砂崩れや崖下への転落などの事故が多発し、運転手及び建設関係者４人が死亡、６人が重軽傷を負いました。新築中の住宅２棟が全壊するという大惨事が起こりました。』

そして、万福寺で勝利の宴会が開かれたのであった。
「諸君！戦いはこれからだ!!俺たちは一人でも多くの人間を殺し!!叩きのめし!!捻りつぶし!!この土地から追い出してしまわなければならない!!」
権太の叫びが響き渡った。
権太の視線が義男に向けられた。何か言えと言うことだろう。
義男も権太のように仲間の狸に背負われる。
義男は自分に従っている故郷を失った狸たちに視線を向ける。
「そうだ!!人間たちから故郷を取り戻すんだ!!俺たちから奪った奴らから奪い返すんだ!!住処を!!川の魚も!!山の果実を!!森の木の実を!!仲間の命を!!」
少し離れたところで正吉も声を上げる。
「そ、それで取り返した土地に木を植えようよぉ！僕たちが大好きな柿の木なんかをさぁ。いっぱい!!」
「「「「うわぁああ～い!!は～やく芽を出せ柿の種!!でなけりゃ鋏でちょん切るぞ!!」」」」

「人間を追い出せ!!」「人間から奪い返せ!!」「人間をぶっ殺せ!!」「人間に思い知らせてやる!!」

「まぁまぁ、今日は目出度い日だ。このことを先ずは祝おうじゃないか。」

なにか変な空気になり始めたのを感じた青左衛門は、割って入る。

攻撃的なことを言う権太達に、正吉の親友であるぽん吉はおずおずしながら訪ねる。

「ねぇ、人間はみんな追い出しちゃうのかい？」

「あたりまえだ。」

「少しは残しちゃくれないかな。昔みたいに…。」

「ダメだ!!人間は俺たちの天敵だ!!害獣だ！永久追放だ!!」

「ダメかなぁ…。い、いや！俺だって人間は嫌いだよ。でも、中にはいい奴もいる。ほんとに嫌いだよ？だけど……もう食えないよ天ぷら？干物にとうもろこし？」

「「ハンバーグ!!トンカツ!!フライドチキン!!ポテトチップ!!」」

多くの狸たちが、涎を流しながら名残惜しそうにするのを見て、青左衛門は「人間も少しは残そう。」と言ってその場を収めた。権太ですら涎を流していた中、義男はそっとその場から離れる。それを見ていた義男の配下たちも離れていく。

連光寺の助六は、義男が下を向きながら何事かを呟いているのに気が付いた。

自分たちへの指示か何かだと思て耳を寄せた助六は、義男のつぶやきが聞こえてしまった。

「あんな奴らは、この世界にいちゃいけないんだ。命を大切にしない連中なんて生きてちゃいけないんだ…。」

「よ、義男さん…。」

助六は、思い出す。鷹ヶ森に逃げ込んだ時のことを…。

鷹ヶ森にたどり着けなかった…、いや、途中で罠にかかって殺され

た家族の事を…。
義男の言葉に返事をする。自然と言葉が出てきた。
「自分もそう思います。奴らは害悪そのものです…。自分たちは義男さんについていきます。」

この時、義男たちは陽気な気質の一般的な狸とは違う気質を手に入れていた。
その気質は、将来多くの者たちが持つことになるものであった。
多少なりとも識者であれば、知っているだろう。
その気質はこう呼ばれている。
『怨念』と…。

１０話　反撃　その２

不慮の事故だった。
胴上げの最中に、開発が継続されるという報道を聞いた狸たちは権太を落とした上に、彼を踏みつけながらＴＶに集まったのだ。
気の毒にも、今作戦の功労者、鷹ヶ森の権太は複雑骨折と内臓破裂により全治一ヶ年の大けがを負ったのである。
権太は、療養に入る際。自分の代行に義男を指名。
義男は一時的とはいえ、強硬派の首魁に収まったのであった。

ＴＶで地元民が祟りを恐れていることを知った、狸たちはさらに行動を始める。
暗い夜道でお化けに化けて人を脅かしたり、建設作業員を不気味な声で脅かしたりして攻勢に出た。
馬背山の神社を根倉にしていた熊太郎は、移転の儀式の最中にこの地の伝承に残る正一位のお使い狐に化けて、その姿を現したのである。
雇われ神主の祝詞は役に立たず。
お使い狐に化けた熊太郎は、供え物の棚と忌み火の焚かれた篝火を倒した。
その時、事態は発生した。
「ぎゃあああああ!!」
倒れた篝火は雇われ神主含む、参加者数名が火を浴びる。
雇われ神主の体が火に包まれる。
熱さから逃れようとする雇われ神主は、近くにいた男性に抱き着く。
奇しくも、その男性は移転賛成派の地元住人のリーダーであった。
儀式は急遽中止され、救急車と警察車両が並び報道各社が事態を伝える大惨事となった。

『馬之背山神社の祟り、移転の儀式の最中の惨事‼』
ＴＶのワイドショーを賑やかした。
『全身火傷によって、２名が死亡。重軽傷者６名。この前の多発事故と言い何かあるんじゃないですかね。』
この、熊太郎の活躍によって馬の背山の開発工事は見合わせとなった。
これにより、狸たちの活動は活発化した。
狸たちのグループは習ったばかりの、化学を行使し各地でゲリラ戦を展開した。
「またか⁉」
工事車両の運転手が車両から降りて頭を抱える。
通のど真ん中に粗大ごみの山が築かれていた。

ある、建設作業員が周辺の木を切り倒していると、切込みすら入れていない木が倒れてくる。
「うわぁぁぁぁぁ⁉」
倒れた木の下敷きになる作業員。
「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ‼」
足が挟まれ悲鳴を上げる。
周辺の作業員が事態に気が付き近寄ってくる。
「また、まただ…。これで８人目だ…。」
作業員の一人がつぶやいた。

そして、若手筆頭の正吉と過激派筆頭の義男は極めつけの作戦を行う。
ある狸が人間の女性に化けて蹲る。
そこへ、付近を巡回していた警察官が声をかける。
「どうしました？」
女性に化けた狸はさらに深くなくそぶりを見せてから一瞬だけ

哂った。
顔を覆い隠して…
「のっぺらぼ～う」
警官は驚いた。女性に顔がなかったのだ。
仰天した警官は自転車を乗り捨て、悲鳴を上げながら逃げ出す。
女性に化けた狸は、警官が乗り捨てた自転車に乗って、それを追いかけた。
警官は拳銃を、追いかけて来たのっぺら坊に放った。
「キャイン!?」
女性に化けた狸は、声を上げ転げ落ちた。
狸の体から血が流れる。拳銃の弾が当たったのだ。
一匹の狸が駆け寄る。
「おい！大丈夫か!!晴美!!晴美!!」
この狸は、撃たれた狸と夫婦だったのだ。
「くっそー!!あいつめ!!」
「おい！武彦どこに行く!!」
武彦は走り出した。仲間の静止も無視して走り出した。

一方で、警官は近くにあったコンビニへ逃げ込み中にいた人々に助けを求めた。
「あ、あそこ！で、出た！」
「「ひょっとして、こんな顔？」」
中にいた人々は、皆狸の化けた姿であった。
「っひ!?」
全員ののっぺら坊を見た警官は気絶した。
「わーい！やったやった！」
「やったぞー!!勝った！」
「いぇ～い！」
勝利に沸き立つ正吉をはじめとする狸たち。
そこに目を血走らせた武彦がやってくる。
武彦は、周りが静止す間もなく手に持っていた太い木の棒で気絶し

た警官を殴りつけた。
「妻の仇だ。」
武彦の周りに、集まってくる正吉ら若狸たち。
警官の頭からは大量の血が流れてくる。
「うわぁ…痛そうだな。」
「これ、死んだのか？」
「どうする？さすがに殺す気はなかったんだけど…」
ポン吉に問われた正吉は、対処に困ってしまう。
「困ったなぁ…。おろく婆に怒られちゃうよ。」
対処に困っている正吉を見て、次に若狸たちは義男の方を見る。
義男は意を決したように、警官に歩み寄る。
義男は警官の腰のホルスターから拳銃を抜き取り、周りの狸たちに周辺に隠れるように言って、合図をするまで出てこないように言った。
狸たちは、命令の意図を理解できず不思議そうにしていたが、正吉は義男に策があることを察して、義男に従うように説得した。

義男は、拳銃を持って歩き出す。
義男は、人間に化けて交番の前に立った。
中では先ほどとは別の警官が書類仕事をしていた。
義男は足元に落ちていた石ころを、交番の窓ガラスに投げつける。
窓ガラスは割れ、警官が飛び出してくる。
義男は、仲間の待つコンビニへ駆け出す。
「こら！待て！」
義男は、警官に追いかけられながらコンビニへ駆け込んだ。
そして、警官がコンビニの中まで追いかけてくる。
「よし！今だ！取り押さえろ!!」
義男の合図で、狸たちが一斉に警官を羽交い絞めにする。
「んぐぅぅぅぅう!?」
「あ、暴れるな！」「足、抑えて!!」「捕まえろ！」
狸たちが警官を押さえつける中、義男は拳銃を警官に向ける。

そして、引き金を引いた。
警官は苦しそうにする。
狸たちは、拳銃の音に驚き、羽交い絞めにした警官から離れようとする。
「離すな!!」
義男の一喝で、狸たちは再び拘束を強める。
しばらくすると、警官は動かなくなった。
「え?・また殺しちゃったよ?・」
「どうするんだよ?・」
「増えちゃったじゃんか。」
狸たちは、混乱していた。
義男は、そんな仲間たちを無視して先ほど殺した警官の警棒を武彦に渡す。
「武彦、この棒でさっきお前が殴ったオマワリをもう一回殴れ。」
「うわぁあああああ!!」
武彦は先ほどの警官を警棒で滅多打ちにした。
「これくらいでいいか。おい!君たち!・あのオマワリに川に沈めとけ!!」
義男に気おされた狸たちは、警官を運び始める。
義男は警官の死体を運び出す前に、拳銃を回収した。
正吉は恐る恐る義男に尋ねる。
「よ、義男さん…そ、それは?・それに、なんで川に沈めるんですか?・」
義男は、何の気なしに答える。
「最初は、仲間割れに見せかけようかと思ったんだけど。これが欲しくなってね。」
「それって、鉄砲ですよね?・」
「川に沈めたのは、死体が見つかるよりは行方不明の方が怖いだろ?・それに、人間に知られるのはまだ早すぎる。見つかるにしろ時間が欲しいからね。」
「義男さん…。」
翌日、警官二名の行方不明報道が行われ、開発が捜査のために遅れ

ることとなった。

11話　藤野狸連携

慎重なやり方に対して懐疑的な意見が上がるようになる。
「江戸時代は、狸の全盛時代であった。作家や文術家は挙って、おらたちを題材にした。」
そんな中で、おろく婆は図書館の一角で講義を行った。
「しかし、狸は目立ちすぎた。人間の反感を買った。文明開化以来、人間たちは狸を大量に殺して毛皮や歯ブラシにした。人間たちの復讐心を満足させたのじゃ…。」
おろく婆としては、今のやり方から過激なやり方に目を向けるようになった若手狸や、それを主導する権太や義男の様な過激派への歯止めにしようとしていたようだった。
「皆の衆、おらたちがこの手痛い経験を活かし、変化を慎んできた数十年。狸にとって、もっとも平和な時代を過ごしてきたことを忘れてはいけませんぞ。化学を軽々しく使って、人間の復讐心を煽るようなことは厳に慎んでもらいたい。」
だが、おろく婆の考えとは逆に作用することになってしまう。
多くの狸たちが冬に備えて、栄養を蓄えている頃。

義男や権太と言った過激派たちは、集会を開いていた。
「要するに、江戸時代までは化学を使っていたってことだろう？」
「逆を言えば、江戸時代まで戦い続けてたから今を維持できたってことじゃないのか？」
過激派狸たちは自分たちの意見を口々に言いあう。
「文明開化の時に不利になったからって、逃げに徹したから今みたいに人間に住処を追いやられたってことだ！」
「腑抜けたせいでこうなった。」「戦い続けるべきだった！」「んだんだ！」
権太の言葉に賛意を示す狸たち。
過激派の狸たちは、おろく婆の言葉を違う形で解釈していたのだ。

そんな、ある日の事。多摩丘陵に疲れ果てた1匹の狸が、造成現場にたどり着いた。
この狸は、造成現場近くの茂みに身を隠した。
そんなとき、造成現場の偵察に来ていた義男ら狸に保護されたのであった。

狸は、万福寺に運ばれ。
鶴亀和尚やおろく婆の尋問を受けることに、とは言え同じ狸であって尋問とは名ばかりの穏やかなものであった。
「随分、お疲れの様じゃが？どこから来なさった？」
「藤野の山々からです。」
「そこは、四国ですか？佐渡ですか？」
鶴亀和尚の問いに答えた彼に対し、正吉は勢いよく尋ねた。
「いえ、この隣の神奈川県の藤野町からです。」
「神奈川県…、なんだ…四国からではないんですか。」
正吉は、それを聞いて落胆した。
「なんだか、期待を裏切ったようですね。」
彼は、申し訳なさそうに鶴亀和尚たちに尋ねる。
「いや、ちょっと待ち人があったもんだから。」
「それはそうと、いったい何の御用件で？」
鶴亀和尚の問いを聞いた彼は目に力を入れ声を出す。
「やっと突き止めたんです！私たちの藤野の山をめちゃめちゃにした土がどこから来たのかを！」
林と言うこの狸によれば、藤野の山々に最近大量の土砂や瓦礫が捨てられるようになって、川の水が汚れ、土砂崩れが頻発し、狸や他の動物たちが大変な目にあっているという。
開発残土が、どこから運び込まれているかを調べるために林さんは人間に化け、不法投棄をしたトラックの荷台に潜伏した。しかし、林さんは変化術が得意ではなくトラックに揺られているうちに眠ってしまい元の狸に戻ってしまったのだ。
「藤野町だけじゃないんです！隣町もそうです！それに、ゴミ処理場

やゴルフ場もあちこちに！」
「山々が削られて、おらたちが迷惑。削られた土が捨てられて藤野町が迷惑。どんだけ業が深いんじゃろ。」
おろく婆はあきれて宙を向く。
鶴亀和尚も頷いて応じた。
「わたしも、ここについてみて驚きました。残土は大都会のど真ん中から運ばれてきたと思っていたのに、ここも山じゃないですか！山を削って、別の山に捨てる。いったい何の意味があるんですか!!まったく理解できません。」
林さんの言葉に、正吉が胸を張って喋る。
「じゃあ、僕らが開発を止めたら藤野町も助けられるんですね！」
それ聞いた林さんは気合に目を輝かす。
「なんて、素晴らしい青年でしょう！皆さんには藤野町の仲間のためにも是非とも頑張ってもらいたいです！」
林の視線と言葉に、おろく婆や鶴亀和尚は目線をそらす。
「それが、そのなんとも…。」
多摩丘陵の狸たちが、何とも言えない態度をとって状況を察した林も肩を落とした。

林はその日のうちに藤野町へ帰ろうとしたが、義男は林を呼び止めた。
義男は、権太の住処に林を招き入れ、二人を引き合わせたのだ。
林を自分の住処に連れてきた義男に対して、権太は冬の蓄えの時期であったゆえに最初は歓迎しなかった。
しかし、林から伝えられた藤野町の窮状を聞くや否や、権太は人間に対する怒りをあらわにした。その怒りをあらわにした権太に対し林も人間に対する不満を爆発させ、二人は意気投合した。
「確かに付近の港北や緑区からも逃げてきた者たちが多くいます。やはり、人間たちの横暴は目に余ります！」
「まったくだ!!」
「林さん、正直に言えば、多摩丘陵の狸たちだけでは勝ち目が見えませ

ん。無論、藤野町の被害も拡大するでしょう。林さん、多摩丘陵・藤野の山々の存続のために私たちは共闘すべきだ。」

「これは、それぞれが独自に何かをするという段階ではないような気がします。私も藤野に戻ったら周辺の仲間たちに呼びかけようと思います。」

林は、義男や権太ら過激派の行動が一時的でも開発を止めた事実を重く見て、多摩丘陵の狸たちと共に立ち上がる決意をしたのであった。

１２話　停滞

林が藤野へ帰った後も、多摩丘陵の狸たちは化学を行使し開発の妨害を続けた。
これらゲリラ戦は、狸たちの勝利と言えた。
開発は一時中断され、狸たちは祝杯を挙げた。
この結果には、鷹ヶ森の権太も満足するものであった。
しかしながら、工事の中断は一時的で、しばらくすると開発は再開された。
川はコンクリートで固められ、のっぺら丘には道路が走り、大量の資材が運び込まれ、遂には住宅の建設が始まった。
しかし、開発現場での奇怪な事故や多摩丘陵での怪奇現象は、全国的に週刊誌やワイドショーなどで取り上げられ有名になった。
狸たちの意気は過激派慎重派ともに上がっていったのであった。
そして、秋になった。
懸案の、化学指南招聘の使者が白熱的なじゃんけんによって選ばれた。
四国方面には、鬼ヶ森の玉三郎。
佐渡へは、水飲み沢の文太。
さらに、長老会議では協力を得られそうな者たちへの使者を各地へと送り出した。
例として諏訪大社に現在も鎮座する二柱には、赤松林の洋二郎と言った感じであった。
翌日の満月の日に、仲間たちと水杯を交わし若者たちは旅立った。
使者が出立した後も、狸たちは怪異に勤しんだ。
開発に影響が出るか否かは関係なく、とにかく行動あるのみであった。
義男たち率いる過激派は、信号に化けるなどして事故を誘発させるなど、過激な行動が目立っていた。また、商店などで積極的に盗みを働いたのもこの派閥である。

狸たちのゲリラ戦は、開発の進行に大きな影響を出すことがかなわず。
権太や青左衛門と言った族長たちを苛立たせ始めていた。

このまま、活動を続けて人間たちを追い払えるのだろうか。
鶴亀和尚やおろく婆のやり方は手ぬるい…。
しかし、権太さんのようなやり方でも足りない。
人間を数人殺した程度じゃ、止められそうにない。
何か、強力な力とか…。武器とか…。
義男は以前警官から盗んだ拳銃を見て物思いにふける。
権太さんの手法は、間違ってはいないはずだ。
もっと、仲間や武器がいる…。
じゃあ、どうやって集める。鉄砲はそうそう手に入るもんじゃない。
鉄砲以外の武器？何がある？刃物とか？刃物はどこにある？どこで手に入れる？
「義男？人んちに上がり込んできて、家主そっちのけで物思いにふけるのは失礼だと覆うんだけど？」
「あ、ごめん。」
最近の影は、もうすっかり言葉を話すようになって片言になることもない。
最近はケモの耳をはやした人間みたいな姿になることが多い。
なんでも、人間に化ける練習中だそうだ。
「ねぇ、義男？あなた最近、疲れてるんじゃない？」
「な、なんでだい？」
「目つきが怖いもの。」
「そ、そんなことは…。」
「さっきだって、物騒なことを考えてた。わたしにはわかるの。それに、もうあなたと会って何年くらいたったかな。だいぶ経ったよね？たぶん、ここじゃあ、わたしが一番付き合い長いと思うよ。」

「あの地獄のような施設で出会ってから、4・5年たったのかな？長いなぁ…」
　影は長い髪をかき上げる。
「そうね。昔とはいっぱい変わちゃったわね。ここも、ここに住むみんなも。」
「だね。君も変わったよ。子犬だった君を拾って、今じゃ君の方が大きい。」
　影は義男の方を向いて、にやりと笑って言ってくる。
「ねぇ。手伝ってあげようか？人間をやっつけるの？わたし、山犬だから狸より強いし、化学だってそこそこ使えるんだから！」
　影は自分の胸に腕を寄せポーズをとる。
「あはは、いいよ。そんなことしなくても、君が街に出たらオマワリとかリョウユウカイとかが出てきて大変そうだもの。」
「そんな、へマしないわよ！失礼ね。」
　影はプクリと頬を膨らます
「いやー。ごめんごめん！冗談だよ！」
「むぅ…。なんだか、ごまかされた感じ……。でも、義男の怖い顔も治ったし良しとしますか。」
　影と触れ合っている時が、義男にとっての癒しの時間であった。
「あ、そろそろか。正吉とおキヨの双子星作戦が終わる頃だ。ちょっと行ってくるよ。」
「うん、いってらっしゃい。」
　義男と影の関係は、すでに夫婦のようなものになっており、彼らを知る狸たちにとって影は義男の内縁の妻であると認識されていたのである。

　正吉達の双子星作戦は成功を収め、番場にいた作業員を追い出すことに成功した。
　しかし…。次の週には新たな作業員が現れ、幾度追い返しても途切れることはなかった。

『地元では、狐か狸の仕業ではないかと言われているようですが？』
『であれば、簡単なんですがね。そう言った動物を退治すればいいだけですから。』
　ＴＶ番は緊張した。
『しかし、あぁ言う化かし方は昔話にそっくりですからね。そういう噂が立つのもわかりますね。』
『それこそ、誰かが悪質な悪戯や噂でも流しているのでは？』
『悪質な噂とはなんだ!!俺はこの目で!!』
　テレビの雛壇に座る化かされた人たちがヤジを飛ばす。
『まぁまぁ、そう言った動物は害獣駆除の対象にして駆除しますので、そう言った被害を受けた方々は、役所に連絡ください。証拠があればの話ですがね。はっはっは！』
　正吉をはじめとする狸たちは人間を化かすことによって、開発を止めるということに懐疑的になり始めていた。

１３話　藤野狸決起

冬の終わり、雪解けが始まったころ。
正吉主導によるショベルカー落とし作戦が決行された。
「「たんたん狸の金玉は風も無いのにぶ～らぶら、それを見ていた親狸腹を抱えてワッハッハ!!!」」
狸たちはたんたん狸の金時計を歌いながら凱旋した。
この行動に対して、長老衆は賛否両論であった。

『夏以来のニュータウンの怪に便乗したもののようですが…』
ＴＶを見た狸たちは…
「なんということを!!」
青左衛門は正吉を責め立てるが、それを義男は庇う。
「いや、問題はないでしょう。奴らは私たちを見ていない。むしろ、これくらいのことはやっておかないと、奴らは何も感じないでしょう。」
「くっだらねぇ…。」
権太は、そう吐き捨てたが義男は別の思いを抱いていた。
狸がやったと言う直接的な言葉を聞いて、各地の他の仲間たちの呼び水になれば…。
人間にはばれないように、各地の同胞たちに決起を促す。難しい条件だが、勝機はこれしかない。

舞台は変わり、ここ小松島市の金長大明神では、この地の主六代目金長に事の次第を告げた玉三郎は上京を願うと、そのままどっと病に伏したが、金長の娘小春の献身的な介護もあって奇跡的に回復し、この春二人は夫婦となり３匹の子供をもうけたのであった。
奥殿では、四国を代表する長老狸たちの深刻な会議が続いていた。
開発阻止と言う一点では、全国的な開発に歯止めをかける意味合い

で全員賛成であった。
しかし、誰を送るべきか?後の四国の収めを誰に置くかが問われ、万が一の際の跡目相続は喧嘩出入りなく円滑に行えるかなどが問われた。
「父様たちは今日も会議会議。こんなにいい日よりなのに。」
「正月からだと、かれこれ半年か。いつになったら会議はまとまるのだろう。」
不安を口にする玉三郎に、小春は不安な胸の内を告げる。
「会議がずっと終わらなければいい。そしたら、ずっと玉様といられるのだもの。」
「小春さん、僕だってそうしたい。だけど、僕の帰りを多摩丘陵のみんなが待っているんだ。」
「玉様、わたし父様にお願いしてみる。玉様がここに残って、金長の跡目を告げるようにって。」
玉三郎が、多感な青春の悩みにふけっている頃。
佐渡に渡った文太であったが、二つ岩のマミゾウ狸の姿は見つからず。大苦戦であった。
そんな中、文太は二つ岩のマミゾウ狸の居場所を見つけることに成功する。
二つ岩のマミゾウは妖怪たちの隠れ里幻想郷への引っ越し直前であり、最初のうちは断られてしまう。
しかし、文太の日参での訪問歎願によってマミゾウは今回限りの条件付きで化学指南を引き受けたのであった。

また、多摩丘陵の狸たちに危機が訪れていた。
歯止めの利かぬ多摩丘陵の開発と、狸たちのベビーブーム、夏の天候不順によって食料不足となり、変化狸たちによる。食料調達でも足りず、変化できない狸たちも街に出て食料調達に勤しんだ。
しかし、やはりと言うべきか。
人家に出た狸たちは罠に掛かったり、車にひかれるなどして命を落とす者たちが続出した。

長老会議では、正吉らによる対策案が出され、賛成多数で可決されたのだが、狸たちの主導的まとめ役であったおろく婆の理性が利かない狸たちへの失意の発言によって長老衆や会議に出席する側近衆の間に暗い空気が流れ始めていた。権太の檄にも反応は弱かった。

『さきほど、神奈川県藤野町相模湖インターチェンジにて推定２０台の車両が巻き込まれる大規模な玉突き事故が発生しました。』

最初のうちは、このニュースに反応したものは少なかった。

『警察発表では、倒木に数台の車両が巻き込まれたことが原因とされています。現場では強風が吹いていたとはいえ、目撃者の証言では木が根元から急に抜けて飛んできたと言った証言もあり、情報が錯綜しています。現場につながりました！現場の鈴木さん！』

まるで、自分たちが多摩丘陵でやったことの様な内容に次第に注目が集まる。

『現場の鈴木です!!現在現場は警察消防救急が入り乱れていて、騒然としています!!』

『木が不自然な抜け方をしたという情報がありますが？』

『確かにそのような情報があります！ただすでに倒木の撤去が始まっており、確認はできておりません!!』

『人為的な、ものではないかと言う話もありますが？』

『はい！こちらの様な被害は出ませんでしたが、相模湖東出口でも同様の事故が起きており、そのような話が出ていますが、警察や関係機関からの公式なものではありません!!』

狸たちは、ＴＶに注目する。

すると、正吉がＴＶの画面を指さす。

「あ！あれ！林さんだ!!」

事故にあった被害者たちが治療を受けている一角から、ＴＶカメラの方に視線を向ける林と２匹の変化した狸の姿があった。

「誰？」「どういうことだ？」「誰の事だ？」

疑問の声が上がったが、権太が歓喜の声を上げる。

「藤野の奴らだ！隣の藤野町の狸たちが立ち上がったんだ!!俺たちに協力するために、土砂の流れを食い止めたんだ!!俺達には味方がいる

ぞ!!仲間がいるぞ!!戦いは終わりじゃない!!今始まったんだ!!」
権太の言葉に、強硬派の一人熊太郎が続き、他の狸が追従した。
「そうだ!!流れはこちらにあるぞ!!やるぞ!!」
「熊太郎の言う通りだ!!いける！いけるぞ!!」
「人間を追い出せ!!多摩丘陵を守るんだ!!俺たちの多摩丘陵を!!」

多摩丘陵の狸たちは藤野の狸たちの決起に勇気づけられた。
この報道を聞くために、ＴＶの前には多くの狸達が集まって来ていた。
「みんな!!四国の長老をお連れしたぞ!!」
四国へ旅立った玉三郎の帰還であった。

１４話　邂逅

「諸君！我らは道中、山の変貌をつぶさに目にしてきた。同情に堪えん!!ただちに招集をかけて、今夜大集会を開いていただきたい！」
四国より来た金長狸の言葉によって、四国三長老を迎えて決起集会が開かれた。
しかし、金長の要求通りの即日での集会とはならなかった。
５日後の満月の夜に開かれることとなった。
これは、共闘勢力に当たる藤野の狸たちにも四国三長老の到着を知らせるべきと言う意見が、臨時長老会議で出たためであった。
会議で大集会延期が決まった、その日の夜。
藤野の林より、返事の使者が来る。
その使者は、１週間後の大集会開催を要求した。
使者を介した林の回答は、以下の通りである。
多摩丘陵の狸たち同様に、ニュータウン開発に苦しんでいる狸たちにも連絡し、大集会に参加させたいという旨が伝えられた。
これを伝え聞いた。四国三長老は多摩同様の開発が関東近郊で複数進んでいることを危惧し、彼らの参加を認め。１週間後に大集会開催とした。
１週間後、ニュータウン計画及び土地開発計画によって危機に立たされている関東圏の狸たちの代表団が到着。
万福寺には全国的に有力な狸たちが集結した。

三長老の中心格である真ん中に立つ老狸が口を開く。
その、穏やかな声の中に力強さを感じた狸たちは、普段の様なおちゃらけた態度はなかった。
「今宵はよい月が出とるのう。皆の衆…、儂は屋島の禿じゃ。今年で９９９歳になる…。」
次に刑部狸が語りだす。
「諸君！本州に比べて、四国の開発が進んでないのか？それは我々狸

が、御山をしっかり守っているからである。四国では狸を怒らせたら、どんな災難がふりかかるかを人間たちはよーくわきまえておる。その証拠に、各申すここに居並ぶ3人はすべて神社仏閣にまつられ、人間にあがめられているのじゃ！申し遅れたが、儂はかの八百八狸を統率する松山の陰神刑部である！」

三人は御神体に変化して注目を集める。

老狸の中には手を合わせたり平伏するものすら現れる。

「私はかの金長大明神の末裔、六代目金長である。我らは東京の人間をあっとしさる為に、秘術・妖怪大作戦を発動することを決めた。この妖怪大作戦には恐るべき精神集中力を必要とするため。我らは術に準じて命を落とすやもしれん。しかし諸君。諸君らがこの作戦を誤りなく完遂するならば…。人間どもは必ず、我々狸に対する尊敬と畏怖の念を、その心に取り戻すにちがいないのじゃ。」

狸たちが握手と歓声で応じる。

「「「わぁぁぁぁ!!」」」「「「おぉぉぉぉ!!」」」

「そうなれば！その驚き慄き恐れる心を翻弄し、開発を中止させることが一気にできるであろう!!打てる手はいくらでもある！我らはカチカチ山の泥船ではなく、大船を諸君らに用意してきたつもりだ!!諸君!!安んじて我らの船に乗ってもらいたい!!」

刑部が腕を突き上げて演説する。

「「「「「「わぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」」」」」」「「「「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」」」」」」

そして、最後に禿が口を開く。

「わしらは満月が好きじゃ。この満月にわしらの企ての成功を祈ろうではないか。のぅ、皆の衆。」

禿の言葉に多くの狸が頷き、満月に手を合わせた。

真剣に…。

かくして、多摩丘陵における妖怪大作戦は関東圏の狸たちの見守る中、発動されるのであった。

四国三長老の到着を機に、各所へ送られた使者たちが帰還もしくは、何らかの方法で連絡してくることが増えた。残念ながら、使者に送ったもの達の大半からは、頼りにした大妖怪の訃報や、神々がすでに現世にいないことが知らされる内容であった。
一部の例外として諏訪大社の神々と言った存在もいたが、人間と対立するような行動は神々には受け入れられず。生き残りの極わずかな妖怪たちもほぼほぼ門前払いであった。
そんな中で、一つの勢力から謁見の許可が下りた。
東京都内に潜伏している吸血鬼の集団のまとめ役に当たる家系の頭首であった。
義男は変化術を行使し、影を含めた自身の側近数名を連れて都内某所のホテルの最上階にいた。
エレベーターに乗った義男たちは背広を着こみ、ホテルの上層階へ到着した。
影を連れてきたのは、影が最も強いからと言う単純な理由であった。
エレベーターを降りると中華装束を来た女性が待っていた。
女性の持つ圧倒的な妖気に圧倒される一同であったが義男はなんとか声を絞り出す。
「馬引沢の義男様ですね。我が主が御待ちです。」
「あ、案内をお願いします。」
「こちらへ…。」
すれ違う、貴人たちもただならぬ気を感じる。これが吸血鬼と言う存在か。
中華装束の女性に案内された部屋の向こうには、玉座としか表現できない空間が広がっていた。一応の応接室であったが、部屋の主が醸し出す空気が、そこを玉座たらしめていた。
義男はその場で膝をついた。
「この度は、このような機会を設けていただきありがとうございま

す。」
「えぇ、そうね。幻想が滅びつつある現世において、神秘を再興させようとしているかのようなあなたたちに興味を抱いただけ。」
玉座の主、レミリア・スカーレットは義男に顔を上げるように指先を動かす。
義男は、意を決して顔を上げるとそこには圧倒的な存在。力とカリスマが具現化した様な存在がいたのだ。
思わず、言葉が詰まりそうになるが何とか声を絞り出す。
「ぶ、無礼を承知で！お願いしたき誼があります!!」
「一応は聞いてやる。」
「わ、わたしは多摩丘陵馬引沢の義男と申すもの。この度、スカーレット卿にお目通り願ったは、そのお力を多摩丘陵開発阻止のために奮っていただきたく参った次第!!何卒、哀れな多摩丘陵の狸にお力をお示しください!!」
レミリアは、少しだけ思案するも要望を拒否した。
「確かに、力なきお前らに同情が全くないわけでもない。だが、貴様らに協力することはできない。我々はもうしばらくしたらこの地を去るわ。」
「そ、そんな。」
「幻想郷、この世界唯一の妖怪の隠れ里。聞いたことはあるでしょう？私たちはそこに行くつもりよ。悪いわね…。」
レミリアはそう言って玉座を降りて部屋を後にしようとするが、影を見て立ち止まる。
「ほぅ…狼とは珍しい。この狼、貴様に従っているのか？」
レミリアはそう義男に尋ねる。
「影は、家族です。私が守りたい仲間です。」
レミリアは義男の目を見る。しばらくそれは続いた。
義男は、目をそらさず見返した。
「家族…仲間ね……気が変ったわ。でも、さすがに直接手伝うわけにはいかないわ。だけど、これくらいはしてあげる。」
そう言って、義男の前に短槍を放る。

「これは、グングニルのコピー品だ。私の友である魔法使いのパチュリーが作ったものだ。何かの役に立つはずだ持っておけ。」
義男は再度、手を貸してほしいと歎願しようとしたが声が出なかった。
若干の妖怪化があっても妖怪としてはまだまだ未熟。レミリアとは義男では天と地ほどの差があった。彼女のカリスマにあてられた義男に声を出せと言うのが無理であった。
そうしているうちに、レミリアとレミリアの友人の魔女は部屋を出ていった。
義男の側近は、まだその場にいた中華装束の女性に懇願するような視線を向けるが、反応はなかった。帰れと言う意味だろう…。
義男たちは、短槍をもらった以外は大した成果なく。
ホテルを後にすることとなった。

１５話　妖怪大作戦

決起集会の後、狸たちは直ちに特訓を開始した。
狸たちは血の滲むような訓練を経て、四国三長老をして化け学の集大成と言わせるほどのものを完成させたのであった。
その過程で屋島の禿が９９９歳の誕生日を迎え、宴会の余興に那須与一を披露した。
この余興で、那須与一を演じた禿は見事に扇に矢を当てて見せた。
「時…、来たれり。」
これを持って、妖怪大作戦は決行されることとなった。
「「「おぉおおおおおおお!!!」」」
「「「「おぉおおおおおおおおお!!!」」」」
「「「「「おぉおおおおおおおおおおお!!!」」」」」
この祝いの宴には関八州の狸勢力から特使が送られ、妖怪大作戦の成功を確信したのであった。

ついに、妖怪大作戦発動の時がやって来た。
天候は曇り風はなく、うすら寒く湿度６５％、絶好の妖怪日和であった。
古来、化け物や妖怪の類に変化して人を驚かす事は、狸たちの最も得意とするところであり、四国三長老を筆頭に義男、権太、正吉、ぽん吉、青左衛門、熊太郎、そして鶴亀和尚におろく婆と老若男女問わず。多摩丘陵の狸たちの総力を結集したこの作戦は、狸たち一匹一匹に潜在する気や妖力のエネルギーはもちろんの事、自然界に混在する火力・電力・風力・水力・浮力と言った諸々の力をいかに引き出して、蓄積させて放出させるかにかかっていた。
そのために行った特訓の激しさは、とても筆舌に及ぶところではなかった。

老いも若いも、雄雌も、変化できるもできないも関係なく。さらには関東圏の有志狸たちも参加し、力を出し合ったのである。
狸たちの闘志は舞い飛ぶ炎となって、まだ見ぬ多摩丘陵周辺の人間たちへ見せつけるために全力投球してしまっているのだ。

夜、世間一般では夕食終わりの時間帯。
団地の建物の影に柳の霊の影が現れ、唐突に巨大な墓石が生えてくる。
住宅街の枯れた桜並木に灰をかけ「桜に花を咲かせましょう！」の掛け声で桜に花咲かせる変化狸たち。
「ん、なんだろう？」「なんのさわぎ？」
異常に気が付いて、敷地の外やベランダに立つ住人たちの目には驚きが目に飛び込んでくる。
「わっ!?なんだこれ!?」「わぁ…」
普段見慣れてモダンな街灯が、時代を感じさせるガス灯や篝火に姿を変える。
自分たちの足元を手のひら程度にしか見えない小人が駆け抜け、目の前の道を魑魅魍魎が闊歩する。
「おぉ…」「す、すごい…」
人間たちからは感嘆の声や拍手が送られる。
風人に雷神、唐傘お化けや歴史の偉人に虎や獅子などの動物に変化する狸たちに、人間たちも老若男女問わず目を輝かせていた。聴衆の中に混じり様子を見守っている鶴亀和尚はうまくっている様子に嬉しそうにしきりに頷いていた。
少々調子に乗った狸たちの一部に、テニスコートのフェンスや外壁の一部を壊してしまったものや、夕食時ゆえに人間様のお食事に手を出してしまったお調子者の存在は御愛嬌であろう。

そして、作戦の締である大津波を刑部らの狸たちが投影する。
刑部の横に並ぶ義男や他の狸の額にも血管が浮き出ており、額から

血を流す者たちもいた。
押し寄せる津波に飲み込まれ、もがき暴れる人間たち、木や電柱にしがみつき、ベランダによじ登ろうとする人間たち。
得も知れない存在による天変地異に人間たちもこの時ばかりは、得体のしれない何かを恐ろしく思い恐怖した。
刑部が術の行使のし過ぎで倒れると、術のバランスが崩れ始める。
「まだだ!・まだ終わらせない!!」
刑部の抜けた穴を埋めようと義男は必死で負担を引き受ける。
刑部の穴は、あまりにも大きく義男と一緒に術を行使していた狸たちは一匹、また一匹気を失い倒れていく。
義男の負担は、膨れ上がっていく。彼の頭から方が焼き切れんほどの力がかかり、まるで汗のように頭から血が流れ始める。
「ぐぅぅぅう!!オン・キリキリ・バザラ・ウン・ハッタ!!!オン・キリキリ・バザラ・ウ゛ン・ハッタ!!ゲフッ!!オ゛ン゛・ギリ゛ギリ゛・バザラ゛・ゴボォ!ウ゛ン゛・バッダ!!!ガァァァァァァァ!!!!」
全身から血が流れ、真言を唱える口からも血が溢れ始める。
「い、いかん!!耐えるんじゃ!!」
金長は、若干焦りを交えて義男に訴えかける。
金長の声が聞こえているのかは、もはやわからなかった。
義男は白目をむいたまま、一心不乱に印を結びきり続けていた。
「義男が死んじゃう!!誰か!!やめさせて!!義男が死んじゃうよ!!」
義男の内縁の妻の地位を確立しつつある影の、悲痛な叫びが響く。
「あともう少しじゃ!!」
金長の言った通り、作戦は終わりに入っていた。住宅地の津波が引いていき、怪異一つ、また一つと収束していく。前座組や序盤組の狸たちが戻って来て、舞台裏の惨状を見て慌てて補佐に回る。
義男の術の負担が減り、なんとか一定に落ち着いたときであった。
義男の背負っていた短槍が輝きだす。
「あのものの槍が、あのものの力と共鳴しておる…。」
「ガァァァァァァァァァァァ!!!!!!!!」
屋島の禿の言葉と共に、義男の叫び声が響き渡る。

術に宿る、狸たちの思いが短槍を通りて義男に流れ込んでいるのだ。
義男の体から、血と共に光発せられる。
その光は多摩丘陵全体を包み込んでいた。
その光は、隣県の地域からも見えるほどであった。
義男の体に亀裂が走っているように見える。
刑部は目を覚まし、大凡の事態を察した。
刑部は、力の暴走が起こっていることを理解した。
詳細こそわからなかったが、目の前の若狸を死なせてはいけないということだけはわかった。
「やるぞ!!」
「うむ。」「相、わかった!!」
刑部の言葉に、禿と金長が呼応して義男に流れる力の奔流を分散させる。
漸く収まった時には、日付けがすでに変わっていた。
影が義男に駆け寄って、安否を確認する。
「よかった…生きてる。」
その様子を一瞥した四国三長老は、
「「「妖怪大作戦は成った!!」」」
「「「「わぁあああああああああああああ!!!」」」」
狸たちの大歓声が上がった。

多摩丘陵の上空。
「随分と楽しそうね?レミィ?」
紫のネグリジェローブの少女、パチュリーがレミリアに話しかける。

「ええ、軽い気持ちでやったことが思いのほか、素晴らしい方向に進んだからね。それに、これだけのことを今の時代にやり遂げるなんて、吸血鬼であるこの私を持ってもしても敬意を表するわ。」
「お嬢様？では？」
中華装束の女性、美鈴が話しかけレミリアはそれにこたえる。
「あの者に、もう一回会ってみたい。席を用意できるか？」
「すこし、時間をいただければ。」
美鈴は素早く、その場を離れ。
レミリアは赤い霧へと変わり、パチュリーは魔法で転移して、その場からいなくなった。

16話　それぞれの…

妖怪大作戦は成功、狸たちは刑部や義男と言った負傷者を除いて連日連夜の宴会騒ぎであった。

その片隅では、インテリな狸たちを相手に金長と禿が講釈をしている。

「真相究明が進めば進むほど。人々が目にし耳にしたものは、決して神経の見せるものではなく、認めざるを得んようになるであろう。そして、いかなる科学も合理的解釈も、この謎は解けないことを理解する。」

「そして、人間たちは森羅万象の神秘に驚き、いかに人間が小さき存在かを思い知るのじゃあ。諸君、果報は寝て待て、でも寝るのは惜しい。ならば、祝え。飲めや歌えや、踊らにゃ損じゃ。」

そんな狸たちでさえ、浮かれるほどであった。

しかし、その数日後事態は思いもよらない方向へ進みだす。

『先日の妖怪騒ぎは、ワンダーランドの宣伝隊であったことがわかりました。』

『この度、世間をお騒がせしたことを心からお詫び申し上げます。当社が総力を結集して建設しているワンダーランド、このワンダーランドのすばらしさを知っていただくためには，

街頭に出て無料奉仕で皆さんに楽しんでいただくしかない。そう考えた次第でございます。』

怒りに打ち震えた権太はＴＶを怒りのままに破壊した。

このニュースは狸たちを大混乱に陥れた。

多摩丘陵の狸たちはこの報道に激怒し、事態の無念さに悲憤慷慨し、悔し涙に暮れたあと、頭を抱え、すっかり無力感に陥ってしまった。

この報道が意味することは、狸たちの総力を結集した化け学作戦であった妖怪大作戦は失敗に終わり、強欲な人間の食い物にされると言う狸たちにとって、最も望まぬ結果になってしまったということで

あった。
また、人間たちの乱開発に脅かされていた日本中の狸たちにとって、四国三長老が主導した妖怪大作戦に対する期待は大きかった。それ故に、失敗による反動は非常に大きいものであり、狸社会に暗雲が立ち込めたのであった。
また、映像に残っていなかったこともあり報道は次第にしりすぼみになり、妖怪パレード騒ぎはたちまち沈静化してしまったのであった。

この頃になってようやっと佐渡に旅に出ていた文太が、佐渡より二つ岩マミゾウを連れて戻って来たのであった。
しかし、四国三長老たちであったが陰神刑部は作戦の際に消費した力の消費により、余命いくばくもない病床の者となり、屋島の禿は意気消沈し心身喪失状態となっており、まともに応対できたのは金長狸だけであった。
一度は、関東を中心に結束しつつあった狸たちであったが、その結束は綻びを見せ始めていた。

金長とマミゾウは、マミゾウの所有する都内の高層マンションの一室で会合を開く。
「この、おかしい世界を作ったのが人間だ。あたしら狸が寄り集まったところで…、これをどうこうできると思うか?金長よ…。」
「我ら狸も、狐に倣い人間として人間の世界に潜るしかないのであろうか。」
金長の言葉にマミゾウは、難しい顔をしてから重たい口を開く。
「それしかないのではないか…。それに、全ての山林が消えるわけではないんじゃから…。」
金長の肩を落とした姿に、マミゾウは幻想郷に来いと言うことが出来なかった。
あくまで故郷に居続けることに拘る狸社会と、幻想郷の作りの関係で、別段忘れられたわけでもない狸たちの大規模移住など、どんなに

贔屓目に見ても妖怪未満の変化狸では大規模移住の際に人目を引いてしまうことへのリスクを幻想郷の管理者が認めるとは思えなかったからだ。
そして、今なお狸たちを守ろうと思案する金長に、自分たちだけ助かろうなどと厚顔無恥なことなど言える訳がないと、マミゾウも一層表情を暗くした。

マミゾウや金長が、多摩を離れていたころ。長老会議では議論が重ねられたが、これと言った成果はなく、会議の形骸化が始まっていた。
形骸化した長老会議に見切りをつけた権太は、傷の癒えた義男と共に強硬派の仲間を公然と募り始めた。
妖怪大作戦の失敗は、事を起こした狸たちを意気消沈させたが、逆に他の者たちをたきつけることに成功していたのであった。
そして、義男たちが仲間集めに勤しんでいた時。彼らは接触してきたのであった。
「お久しぶりですね。何年か前に鈴ヶ森まで送った時ぶりですか？」
「貴方は…。」
堀之内の竜太郎を中心とした狐たちであった。
妖怪大作戦を見ていたのは人間だけではなかった。
狐や化け猫と言った変化者たちの目にも止まっていたのだ。

義男や権太と言った強硬派、病身を押してやってきた刑部らは、狐たちの持つ料亭で大きな席を持つこととなった。
この席には、多摩以外の強硬派たちも列席し、この会合で話し合われる内容がいかに重要なものかを物語るものであった。
「かつて、我々狐は人間に一矢報いることなく、こうして人間社会に潜むことを選択しました。ですが、しょせんは違う生き物、どこかで綻びが出て来るものなのでした。我々は皆さんの妖怪パレードを見たときに思ったのです。なぜ戦わなかったのかと…」
竜太郎の言葉に、狸の一匹が水を差す。
「だが、俺たちは負けたぞ。」

「そうでしょうか?すべてから逃げて妥協した我々狐と、人間に一矢は報いた皆さん狸とでは、やはり違うのではないでしょうか?それに、完全に止めることこそできていませんが、開発を遅れさせることは出来たではないですか?」
「あぁ、確かにその通りだ。俺たちは人間が憎い!!人間に紛れているお前たちはどうなんだ?」
　権太の言葉に、向かい側に座る狐たちはこちら側をにらみつけるようにしてから口を開く。
「…憎い。憎いに決まっています!皆さんとは違って、一旗揚げ損なった我々が、皆さんのパレードを見て、どれだけ自分たちを情けなく思ったか!」
「竜太郎さん。」
「私たちは、皆さんより長く人間と言う生き物を見てきたことか。だから、わかるのです。あの不自然で理不尽な生き物が、いかに歪んで醜い存在かを…。狐の妖怪で有名なのは九尾の狐です。かの大妖怪は、陰陽師に封印された後も殺生石と呼ばれる瘴気を出す石として、人間たちに呪詛を吐き続けました。」
　狐たちの目が妖しく光る。
「狸の皆さんの気持ちが、私たちにも伝わってきましたよ。憎しみの感情が…ね。私たちは同志です…人間を憎む同志です。今こそ奴らに罪を贖わせるときです。今こそ血の贖いを…。」

17話　二代目陰神刑部継承

「皆の活躍は遠く佐渡まで届いた。妖怪大作戦はまさに我々狸の団結の力だった。主らの大作戦は人間どもを感嘆させ圧倒させた。だが、理不尽にもそれは、人間離れした人間の仕業とされてしまった。」
「……ならば！我々は人間離れした人間として人間社会で暮らしていけばよいのだ！」
マミゾウと金長の提案は、一考する価値はあったが、多くの狸たちはこの提案にノーを示した。
義男と権太は、病床の身とは言え人間との抗戦の継続を明言している刑部を旗頭に独自の勢力を形成し始め。
力のないものを見捨てる二人の提案は、慎重派ではあったが正吉率いる若手グループの慎重派離脱を促してしまう結果となった。
また、保守中道ともいえる鶴亀和尚も変化者のプライドを捨てた二人の言葉を聞いて、黙ってその場を後にしたのであった。
また、その場に残ったものも難しい顔をしたまま、二人に言葉を返すこともしなかった。
禿狸は、変化できない狸たちを集め、踊念仏の教祖となっていた。

それからしばらく、刑部狸の容体が急変した。
権太の妻お玉や影と言った女性陣の必死の看護も虚しく、刑部の容体は次第に悪化していった。
自分の死期を悟った刑部狸は、自身の重臣にあたる伊予の喜左衛門を呼び寄せた。
金長やマミゾウが独自の行動に入っており、牡丹餅山を離れていたため刑部は屋島の禿を見届け人とし、自身の後継者を指名した。
ほとんど声にならない、かすれた声で喜左衛門に耳打ちする。
それを聞いた喜左衛門が声に出して周りに伝える。
「大地から木々をへし折り、山を削り、川を汚し埋めた人間どもの増長は目に余るものあり。これを捨ておくことは、日本中の山林の死滅を

意味するものであり、そこに住まうもの達の死滅を意味するものであることに気が付いた。ここにいたり、我、陰神刑部は人間たちに対し徹底抗戦することを望む。しかしながら、我が命、長くないことを悟るに至り。わが心を理解し、妖としての力を持っている馬引沢の義男に、この陰神刑部の名を継ぐことを望むものである。」

刑部の跡目の指名であった。

本来であれば、存命する血縁者がいない陰神刑部において、順当にいけば筆頭重臣である伊予の喜左衛門が継ぐのが普通であったが、刑部は義男の妖怪としての才覚と、指導者としての能力を評価しており、喜左衛門も義男の妖気を感じ取り即座に忠誠を誓った。

また、その日の夜。つまるところの刑部が天に旅立つ直前、屋島の禿と刑部の話し合いの席が持たれた。刑部としては金長やマミゾウの人間への迎合案はなんとしても阻止したかった。禿はこの時、念仏踊りの教祖としての活動のみを行っており、四国の長老の仕事を実質上放棄していた。当の本人もすでに失意にあり気力もなかった。

刑部としては、マミゾウや金長に対抗するために、義男には自身の持つすべての地盤を引き継がせるつもりであり、義男も多摩丘陵の強硬派第二位の実力者であり、関東圏の対人間強硬派の纏め役であったが、これを足しても二人の力に今一歩及ばないことを危惧して、禿に対し自身の地盤を義男に継承させることを迫ったのであった。

これに対し、禿はすでに権力争いから身を引いており権力の継承は滞りなく行われることとなる。

翌日、刑部は天へと召された。

その後、多摩丘陵においてある程度の緑地を残すことに成功した馬の背山の神社にて、執り行われた刑部の葬儀は粛々と執り行われた。喪主は馬引沢の義男である。

そのあとに執り行われた二代目陰神刑部継承の儀は、関東圏の主要な強硬派が集まっていた。また、義男の支持を表明していた竜太郎狐と縁のあるにある高位の狐たち、関東圏以外の日本の有力狸たちも自身の縁者や重臣を派遣した。

また、化け猫の総大将に当たる猫鬼肖（ネコショウ）を中心に、狒々

と言った動物妖怪の残党たちの姿もあった。
陰神刑部の名を継いだ義男は、関東圏の狸たちの前で陰神刑部継承を宣言し、ここに関東における抵抗運動を二代目陰神刑部狸義男の名を持って掌握したのであった。
「先代刑部様はお亡くなり、屋島の禿様も隠居なされた。残る金長様や二つ岩様も、全てをあきらめたかの様な策を示すのみ。もはやこれまでなのか？一切の希望を捨てるしかないのか？滅びは避けられないのか？私の答えは否!!断固として否である!!なにがあろうとも、我々の抵抗の炎は消えない!!消してはならないのである!!」
義男のそばには影が狼としての姿を見せて横に控え、権太や熊太郎と言った初期からの盟友と先代刑部や屋島の禿の配下であった四国狸の有力者たちが並んでいた。
その姿は妖怪、それも大妖怪と並んでも遜色のない妖気を放ち、もはや神々しさまで感じられるほどであった。
「ここにお集まりの皆々、なぜ何もしないのか？ここにいる皆々は何をお望みか？このまま何もせずに、全てを奪われるのか。種族の誇りを捨て、全てをあきらめ絶望し、まるで鎖につながれた家畜のように隷属し、人間としてあの狂った世界で生きていくと言うのか…。これほどまでの犠牲を払っても失いたくないものがあると言うのか？仮に人間に紛れて生きるとして、自分の子供たちに種の誇りを捨て惨めに生きろと代々伝え続けるつもりなのか？」
狸や狐たちは拳を握り、歯を食いしばった。
「嫌だ!!」「悔しい!!」
ぽつりぽつりと言葉が返ってくる。
義男は参加者を見渡してから口を開く。
「ここに集まった皆々が、どのような決断をするかはわからない。だが、私はこの場を借りてこう申し上げたい。」
義男が拳を振り上げる。
「我らには緑豊かな大地と美しい水が流れる川や泉が必要だ!!人間よ自然を返せ!!さもなくば死を!!」
義男の言葉に参加者たちが拳を上げ呼応する。

「「「「「自然を返せ!!さもなくば死を!!」」」」」

さらに勢いが増す。

「「「「「「「自然を返せ!!さもなくば死を!!」」」」」」」

18話　はじまり

馬の背山の神社で行われた演説を機に、反人間を掲げた諸勢力は行動を開始した。
二代目刑部を襲名した義男は影響下の八百八狸の召集を指示、並びに四国の長老衆に対し軍隊狸の編成を要請した。
また、竜太郎ら人間社会に潜っていた狐たちの伝手で、基本は包丁や鉄棒などが関東主要の抵抗勢力に流されていき、一部には刀剣類や古式銃すらもが含まれていた。
狐たちが車の中から木箱を下ろし並べていく、狸たちが木箱をこじ開ける。
その中には、乱雑に詰め込まれた刃物や鈍器が入っていた。
関東各地の狸たちは、狐たちが流した武器を持って武装化を進める一方で、酒屋や居酒屋の裏から多くの空き瓶を盗み出し、建築現場などからガソリンや灯油を盗み出し、それをもとに火炎瓶の製造を進めた。

この日、再び義男たちはレミリア・スカーレットと接見する。
「わずかな間に、ずいぶんと見違えたようね。」
レミリアの言葉に義男は平伏して答える。
「いえ、そのようなことは…。スカーレット卿のお与えくださった短槍のおかげでございます。」
グングニルは勝利を手繰る寄せると言うものがあり、この劣化コピーである義男の短槍もこれに類する力があった。
義男は、正確にか否かは別として、それを本能で理解していたのだ。
「ふむ。心がけには感心…とは言っておこうかしらね。でも、それだけではないわよね？面を上げて話してみなさい。内容によっては考えてあげるわよ？」
レミリアは義男の出方を見るように話しかける。
「恐れながら…。スカーレット卿は幻想郷への旅路の支度をされてお

られるとか？スカーレット卿には我らの同胞たちの幻想郷同道を許していただきたいのです。」
　レミリアは値踏みするように義男に返事を述べる。
「それに私が許可を出すと？我々にどのようなメリットがあると言うのかしら？」
　そこで、義男は顔を上げて答える。
「高度に秘匿されたかの地への道を切り開くには、かなり大掛かりな術が必要なはず。」
　レミリアは、目を細めて義男の次の言葉を待つ。
「これほどの大掛かりな術であれば、完全に隠すのは不可能。相当目立つものではないかと察します。」
　義男の言葉を聞いて、レミリアはパチュリーに意見を求める。
「ちゃんと隠蔽はしているわ。魔法の魔の字も知らない現世の人間にどうこうできるとは思えないわ。」
「万が一は絶対にないのかしら？」
　レミリアはパチュリーに再度問い直し、パチュリーはレミリアの意図を察して訂正する。
「そうね。転移の術は詠唱開始の時点から術はかなりの光量を持つわ。」
　レミリアは再び義男の言葉を促す。
「だそうよ？馬引沢の義男、いえ、二代目陰神刑部の義男。貴方は私にどんな見返りをくれるのかしら？」
「我々は、スカーレット卿の事が成るまで、人間たちの気を引いてごらんに入れましょう。誰一人の邪魔も入れません。」
「貴方…死ぬわよ？」
「もとより覚悟の上、種の保存のため…同胞たちを死なせぬため…腹はくくっております。」
　レミリアは、義男に背を向ける。
「新天地に旅立つわけだし…、自分たちの影響下にある者達は多い方がいいわね。二代目陰神刑部義男…あなたの提案を受けるわ。」
　レミリアは義男の要請にこたえて、妖狐理などの義男の影響下にあ

るもの達の保護が開始されるのであった。

義男の傘下に納まった喜左衛門は四国に戻っていた。
四国長老会議にて軍隊狸の編成が決定されたためであり、これに加えて八百八狸を率いて関東入りを果たすためでもあった。
四国各地に点在する狸を祭る寺社にある蔵の扉があけられる。
蔵の中から中の物を運び出す。
狸たちは、蔵にしまわれていた赤い軍服を袋に仕舞う。
蔵に仕舞われていた旧式の銃が配られていく。狸たちは持参した竹刀袋やバットケースに銃を仕舞っていく。
狸たちは長時間の移動に耐えるために頭に葉っぱを乗せて人間に変化する。
変化した狸たちは、飛行機・船舶・電車・長距離バスなどを用いて次々と関東入りをしていくのであった。
また、四国以外の各地からも少なくない有志の変化者達が関東へと向かっていった。

諏訪大社の神である二柱に、頭を下げる動物妖怪たち。
「お前たち、本当にいくのか?」
二柱の神の一人、八坂神奈子が問う。
彼らの中にいる狒々が前に出て答える。
「ニンゲン、ヤマケズッテル。ゴミステル…ワルイ…。ホカノミンナ、コマッテル。」
今度は老狸が歩み出る。
「八坂様、洩矢様。わしら、諏訪の狸もかつて高速建築で住処を追われた。関東で起こっていることは、是の比じゃないくらいに酷いものじゃそうだ。今ここで、歯止めをかけなくてはいずれここまでくるかもしれんのじゃ。…それに、人間の高慢に歯止めをかける最後の機会が今だと思うのですじゃ。」

彼らは、再び頭を下げて諏訪大社を後にした。
彼らを見送った洩矢諏訪子は、悲しそうに彼らを見て呟いた。
その呟きに神奈子は小さく返答した。
「本当に歯止めがかかれば、私たち神への信仰が戻ってくるかもね。でも…。」
「たぶん、無理だろうな…、もう遅い…。人間の信仰心は発展とともに消えた。」

それから、数カ月の時が経った。

深夜、人通りの少ない時間。人間に化けた変化者達が横浜市役所の前に集まる。
彼らは、ボストンバックから港北ニュータウン開発反対の抗議文を取り出し、市役所の門戸に張り付けた。
そして、市役所の周りを囲むようにならび…。
手に持っていた火炎瓶を投げ込んだ。
「ついに、遂にこの日が来た。」
港北の狸のリーダーである新太郎狸は燃え上がる横浜市市役所を見ていた。

19話　進軍

横浜市定例会見

『元来、我々の計画したニュータウンは、昨今問題視されるような無秩序な乱開発の様なものではなく。いわゆるスプロール現象を防止するための物でありまして、先ごろの議会におきまして、本来の想定にない不必要な開発が見受けられたとの報告を受け、議会で精査を重ね検討した結果。計画の一部を削除、もしくは凍結を決定したものであります。』

『この件は、この前の市役所放火事件や連続議員襲撃事件と関係があるのでしょうか？反対派の襲撃と噂されていますが？』

『そのような事実はありません。会見を終了します。』

横浜の港北ニュータウン計画を始めとする神奈川の開発計画が大幅に見直される流れが生まれた。彼ら、狸たちの勝利であった。この会見を聞いたたっつきたちは宴会を開き勝利を祝した。

「「ばんざーい！」「「ばんざーい！」」

当時狸たちは、横浜市役所放火を皮切りに議員宅襲撃、関係施設への破壊行動を繰り返した。

それこそ多摩丘陵のそれを上回る勢いであった。

無論、警察も対処に動いた。

しかしながら、狸たちは変化した姿で襲撃し、警察その他の追跡には別の姿への変化や変化を解くことで追跡を撒いた。

警察の捜査は遅々として進まず、関係各所への被害は広がる一方であった。

報道各社も連日報道を繰り返した。

市長を始めとする関係者たちは、日に日に増える被害に対して見栄よりも自らの安全を優先する結果であった。

この功績を横取りするような存在もなかった。

義男がまとめ上げた狸たちの抵抗勢力の連合体は、神奈川の土地開発を挫く結果となり、抵抗勢力の諸氏たちは大いに盛り上がった。
関東、特に深刻化していた南関東の開発地域の一つである神奈川横浜の開発が止まったことは妖狐理たちにも人間たちにも大きな影響を与えた。
この勢いに乗じて、他の開発計画も中止に持っていこうと妖狐理たちは動くわけである。北関東他の開発地は宅地開発や学術都市設立を目的としたものが多く、鋭角の縮小の余地が多いものであった。しかし、東京や千葉の開発は違う経済や行政と言ったものが多く絡むものであったのだ。
千葉県や東京都は警察に対して強硬措置も場合によっては容認すると強気な対応をするように示唆し、義男らとの対立は決定的であった。
一方で、四国の軍隊狸や刑部家の眷属である八百八狸、関東における反人間の妖狐狸他の諸氏、他地域からの有志達を統一し妖獣連合を創設し指揮系統の一本化を行った。
その時は近い…。
人間以外の誰もが予感していた。

この日、多摩丘陵と言った多くの動物たちは屋島の禿狸主導の下、大移動が開始された。
変化のできるものたちが人間の車両レンタル会社よりバスやトラックと言った大型車を数台レンタルし、乗せられるだけ彼らを詰め込んだ。
それこそ、人間の朝の通勤ラッシュの様であった。
「あんた～」
一組の番いの雌が、つがいの雄と別れを惜しむ。
「安心しろ！次に会うときは、この辺全部元通りだ！」
つがいの雄はそう言って雌を安心させようとしていた。

この光景は各所で見られた。
妖狐狸たちは人間との戦いにおいて、力の弱い子供や雌、そして老獣たちを安全なところへ送る決断をした。
レミリア・スカーレットの庇護下に入り、幻想郷へ疎開移住する決断であった。

疎開組を見送る義男たち。
義男は自分の横で、仲間たちを見送る影に話しかける。
「影、君は一緒に行かなくて良かったのか？聞くところによれば、幻想郷にはこちらで滅んだ生き物がたくさんいると聞くぞ。お前の仲間の狼だって大勢…。」
「義男…。確かにあたしと同じ狼がたくさんいるんだと思うよ。でも、あの地獄を生き延びて今日の今日まで苦楽を共にしてきたのは、あなたたちなんだよ。そんな連れないこと言わないでよ。」
「だけど、この戦いはきっと勝てない。俺はお前に死んでほしくはない。」
「何言ってんのよ。ちょっと前まで、あたしより弱かったのに。もう、大妖怪面して～。」
影は義男に笑いかける。
「…お前、かわいいじゃないか。」
「今更気が付いたの？」
「くはははは。」
義男からも笑いがこぼれ、すぐにまじめな表情に変わる。
「やはり、お前は幻想郷に行くべきだ。俺はお前に死んでほしくない…大切だからだ。」
「義男…、私も同じだよ。好きな人の最期くらい見届けさせてよ…。それが済んだら、ちゃんと私も幻想郷に行くよ。たしか、諏訪の八坂様と諏訪様も幻想郷への移住を計画してるって…。で、スカーレット卿の移住からあぶれたのは後日、守矢神社の移住の時に同行させくれるんでしょ？なら、平気でしょ？お願い…。」

「影…、すまない。」

義男は、影の目を見て答えたがすぐに視線を疎開組に戻した。

ここに残っているのは、人間が憎くて仕方がない連中か。意地でも故郷から離れたくないという連中だ。自分だって、影と言う存在があっても人間憎し、土地離れ難しだ。

妄執に囚われている。わかっているからと言ってどうすることもできない。

この胸にある黒いものは…

疎開組が去っていったのを確認する。

義男は、幹部達に号令をかける。

「聞け!!我がもとに集まった勇士たちよ!!己が家族は安全な地に送った!!もはや、思い残すことはない!!ここに残ったもの達よ!!怒りを!!憎しみを!!恨みを!!我らのすべてを!!人間にぶつけよ!!戦の始まりだぁあああ!!!」

「「「「「「「おぉおおおおおおおお!!!!!」」」」」」」

俺の下に、部下である武彦が駆け寄って来て報告を上げる。

「刑部様、千葉の同志が決起。三里塚にて戦端が開かれました。東京のオマワリ…じゃなかった。警察だった…東京の警察の機動隊が敵援軍に向かったとのことです。」

「予定通りだ。空港施設は好きに破壊しろと言っておけ。それと、千葉の同志に三里塚へ集結するように命令を、北関東方面は南下を始めさせろ。神奈川の同志を北上させ、我らの後詰とする。」

「っは。」

義男は再び号令をかける。先ほどより大声で…。

「目指すは!!首都東京の主要拠点の破壊及び占領である!!行くぞ!!」

「「「「「「「「「「「おぉおおおおおおおお!!!!!」」」」」」」」」」」

２０話　燃焼

二代目陰神刑部義男による大号令によって、各地の変化者達が行動を開始した。
「自然保護団体の皆さん!!空港建設用地より、速やかに退去してください!!皆さんの行動は強盗罪、凶器準備集合罪、および不法占拠に当たります!!この勧告に立ち退かぬ場合は法に基づき皆さんを逮捕しなければなりません!!」
千葉県三里塚の空港建設予定地において、三里塚芝山を根倉にしていた与六狸を中心に近隣地域よりヘルメットや鉄パイプ等で武装した過激環境保護団体の人間に扮した変化者達３００が集結。人間側１００名の警官や空港職員や建設関係者とにらみ合いを開始。
「与六…。」
「イ組とロ組の連中を迂回させて後ろの野次馬の中に…。」

警官たちが強制排除に動こうと歩みだす。
与六たちも鉄パイプや角材を手に向かい合う。
警官たちは腰の警棒を抜きさらに前進する。
「イ組とロ組が配置についた。」
「よし…やれ。」
与六が首にかけたホイッスルを思いっきり吹き鳴らす。
そのすぐ、野次馬の居る方から悲鳴が上がる。
警戒線のカラーコーンを越えた３０ほどの集団が火炎瓶を片手に突撃してくる。
「死ねぇ!!」
「わぁあああ!?」
変化者達の投擲した火炎瓶が警察車両や一部の人間に命中し燃え上がる。
「突撃!!」
「「うぉおおおお!!」」

三里塚を皮切りに各地で諸勢力が決起。

川越の久太郎狐を中心とする集団は一般道より南下し東京へ侵入しようとしたところ。埼玉県警の阻止線に阻まれ、阻止線の強行突破を試みた久太郎狐は、付近の歩道の敷石を剥がしてこれを砕いて投石を行うとともに、棍棒や角材を用いて警官隊及び機動隊を襲撃した。

藤野の林狸を中心とした集団は相模湖インターチェンジより中央自動車道へ乱入した。

また、港北の新太郎狸を中心とした集団も鶴見産業道路へ侵入を果たした。

「やれ!!やっちまえ!!」「落とせ!!」「や、やめろー!?」

この神奈川で決起した二つの集団は投石や火炎瓶の投擲を行い周囲の一般車両を破壊しながら、神奈川県警の警察部隊を攻撃した。また、これらの集団には妖怪の狒々が参加しており殴り倒した機動隊員を高架から投げ落とすなどかなり過激な行動が目立った。

特に、二つの集団は鈴ヶ森出口より侵入した青左衛門の集団と合流することを目的としており、この青左衛門の集団は羽田空港の占拠及び破壊を目的とした集団であったため、刃物や刀剣類を装備している者も多くみられた。

「本部!!本部!!暴徒の数は２０００を超えている!!至急応援を!!」

数時間後、この３つの集団は合流。一般道へ通りさらに馬の背山の熊太郎狸や海老取川の黒介猫と合流し穴守橋・稲荷橋・弁天橋で警視庁機動隊と激しく争ったのであった。

影の手に握られた、ラジオからはすべての番組が中断され臨時ニュースが流れていた。

『暴動は関東各地で発生しています!!特に東京千葉は、非常に大規模なものです!!住民の皆さんや付近にお勤めの皆さんは建物の中に避難し、扉や窓には一切近寄らないでください!!』

影は思い出す。昨日のことを…
「義男、やめようよ。勝てるわけないよ…。」
「わかっている。この前言った通り、俺たちの身勝手な意地だ。」
決起を決めた義男に、影の言葉は、思いは届かない。
「わたしの事、嫌いになったの…。そうじゃないなら、一緒にいてよぉ。ずっと、一緒にいてぇ…。」
気が付けば、嗚咽が混じっていることに気が付く。
義男は、黙ったまま私の頭に手を置いた。
初めて会ったときは同じくらいの背丈で、すぐに私が追い抜いた。
狸と狼だもの、普通よね。
でも、気が付いたら義男は私なんて軽く超える大妖怪になっていた。
背丈も妖気の影響か。私よりずっと大きくなった。
「ずっと、一緒だと思ってたのに…。」
あの時のまま、他のみんなと一緒に野山を駆け巡っていられると思ったのに、気が付いたらこんなことになっちゃった。
「義男、…わたし、あなたの事が好きよ。これからも、ずっとね。だから…思い出をちょうだい。」
私は、義男を抱きしめて押し倒した。
体格的に不可能なんだけども、義男は私を抱きしめて受け入れてくれた。

「影、お前はスカーレット卿と行け。」
「な、なんで？」
「お前にはせめて早く安全なところで暮らしてほしい。それに、惚れた女に自分の負ける姿なんて見せたくない。」

「奥方様は新宿御苑の魔法陣に入ったとの事です。」
武彦が、影の安全を知らせる。
「軍隊狸たちに敵主要拠点を制圧させてください。権太さん…」
「おう…。おまえ、刑部狸に襲名しても俺に対しての敬語は抜けなかったな。」
「権太さんは、ぼくの兄貴分ですから。」
義男は照れ臭そうに笑う。
「義男、すまねぇ…。おれが、あんなこと始めなきゃ、お前がこんなことをする羽目にはならなかった。」
「そんなことはないですよ。誰かが必ずやったでしょう。それに始めたのが権太さんでよかったですよ。権太さんじゃなきゃ、僕はここまでにはなれなかったし、こんなことは成し遂げられなかった。きっともっと早くに野垂れ死んでました。さぁ！始めましょう！大事な良い子を幻想郷に送り出しましょう！」
「あぁ、そうだったな。すまねぇ、かっこわりぃとこ見せちまったな。子分連れて先に行ってるぜ。」
「はい、ぼくも行きます。」

義男は、空を見上げる。見事な満月が浮かんでいた。
「時は来たれり…。いざ行かん…我が死地へ…。」
そして、遂に義男率いる本隊が進軍を開始したのであった。
日比谷公園に集結した精鋭八百八狸が前進を開始した。

21話　希望絶たれる

テレビ局

若手慎重派の正吉と保守中道の鶴亀和尚が、行動を起こした。

「和尚、このままでは義男さんや権太さんたちは全滅です。」

「彼らは、己の死を受け入れておる。じゃが、彼らの様な者たちを失うことは何としても避けなばならん。」

鶴亀和尚と正吉らの一団は、手勢を率いてテレビ局を占拠。放送を止めさせた。

他の報道局も、正吉らの行動もあってか報道拠点を東京から地方へ移したりして避難を開始した。その結果、東京の現状を一般の人間が知ることは非常に難しいものとなっていた。

一部のテレビスタッフ以外を倉庫に監禁して、放送の準備を始める。

「正吉！何とか動かせそうだよ！」

佐助が、調整室から両手を振って合図を出す。

「このままじゃ、みんな死んでしまう。女子供を逃がせばいいって話じゃないのに…。」

憤る正吉の肩に手を置いて鶴亀和尚が諭すように話しかける。

「大丈夫じゃ。これがうまくいけば、義男や権太、それに彼らについていった多くの者たちを助けられるはずじゃ。」

「そろそろ、席についていただいても？」

彼らに共感した狐である庄一郎が、二人に声をかける。キャップ帽を被り、テレビクルーに成りきっている様だ。

「庄一郎さん、まるでテレビ局の人みたいですね？」

「あははは、こういうのは形から入りたいじゃないですか？」

彼らの様子を穏やかな表情で見守っていた鶴亀和尚は、昔の事を思い出す。

遠い昔、自身の父親の話であった。

自身の父親は、茂林寺と言う寺で長い間茶釜に化けていた古狸で

あった。
自分の妖力を使って茶を勝手に沸かせたりして和尚を驚かせたり、小僧に悪戯をしてからかったりしたが寺からも大切に扱われ、概ね穏やかに過ごしていた。
ある時、縁あってか茶釜となった鶴亀和尚の父は貧しい古道具屋に売られてしまう。
その時こそ、自分を売った和尚たちに不満を覚え。のんきに良い商品を手に入れたと、鯛なんぞ調理している古道具屋の主人にムカついて鯛を全部食って、店を出て行ってやった。だが、あとで心配になって様子を見ると、案の定店の主人は肩をがっくりと落とし途方に暮れていた。これは悪いことをしてしまったと思った彼は、おずおずと主人の前に出て「悪いことをしてしまった。」と謝罪した。すると店の主人は彼を許し、そのまま彼を従業員として迎え入れてくれたのであった。
そして、彼は主人の下で商売をして店を盛り立た。さらに年月が経ち、主人は流行り病で倒れ亡くなってしまう。主人には後継ぎがおらず、経営者としての才覚を持っていない彼は泣く泣く店をたたむことにした。さらに、もともと旅商人であった主人の弔い寺を知らなかった彼は、主人の供養先探しに苦心したのだが、見つからず。藁にもすがる思いで、自身がかつていた茂林寺にお願いすることにしたのであった。彼が頼みに行った住職は、快く引き受けてくれたのであった。その住職はかつての小僧であり、どことなく自分の事を覚えてくれていたのであった。住職は、かつてした悪戯の事を咎めることもなく自身と主人の墓を大切に扱ってくれたのであった。
その後、彼は茂林寺で住まわせてもらうことになり、時が経ち。その息子である鶴亀和尚が生まれ、彼の死後、茂林寺から末寺され今の万福寺の住職として納まり１００年近くの時が経ったのだ。
ちなみに、父の最期は戦時中。寺の住職として炊き出しをしている最中に米軍戦闘機の機銃から人々を守るために身代わりとなって死んだ。当時の人々は父の最期を悲しみ弔った。戦後の調査の際には、人々は鶴亀和尚とその父の事は決して口外しなかった。

かつて、日本での多くの戦争では、少なくない数の戦争に妖怪や変化者達が協力していた。有名どころでは四国の長老狸たちが日露戦争における旅順要塞での戦闘で活躍したことなどが有名なものであった。

日本人と妖怪変化はかつて、間違いなく共生関係を築けていたのだ。

それが、現代になるにつれ崩壊し力ある妖怪はどこかへ去り、人間たちは自分たちの事を忘れ傍若無人にふるまうようになってしまった。そして、今に至り妖怪変化は滅ぼされようとしていた。義男や権太の決起は、滅びようとしている妖怪変化の断末魔の様なものであった。

少なくても、鶴亀和尚はそう理解した。

だが、鶴亀和尚は思う。

もう、戻れないのか。

かつてのように、人間と線引きが出来ていた時代に戻ることは…。

そうでなくても、新たにお互いに納得がいく形で引き直すことは出来ないものかと…。

父を迎え入れてくれた古道具屋の主人や茂林寺の住職のように。

あのとき、自分たちを米軍の連中から匿ってくれた住人達のように。

正吉はあの時言っていた。「よい人間はいる。」

そう、この時代にもまだ…。

「放送流れます！10秒前！」

人間のテレビスタッフが合図を流す。

「8」

どこかに、儂らの様な者たちの声を聞いてくれる人間が…。

「7」

苦しんでいる儂らに手を差し伸べてくれる心ある人間が…。

どこかに…。

「6」

少なくても、今、この放送を流すことに協力してくれた人間はいた。

「5」
まだ、希望は残されているはずじゃ。
「4」
鶴亀和尚は周りを見まわす。
「3」
人間と狸と狐と猫が、この争いに終止符を打とうと集っている。
「2」
まだ、引き返せるはずなんじゃ。
「1・スタート!」
テレビ局を占拠した鶴亀和尚は人間たちに呼びかける。
「わしらは!いま、東京で騒ぎを起こしているものの一部ですじゃ。事の起こりはあなた方人間の山林開発によってわしら動物の住処が無くなってしまったことにあります。わしらは、人間の皆さんにこれらを思いとどまっていただきたく。多摩丘陵や神奈川港北などで騒ぎを起こしました。もっと穏便にと言う皆さんもおられるでしょう。やりました!やりましたとも!初期のお化け騒ぎや、ワイドナショーの取材班の前で化けてやりましたとも!でも、皆さんは面白おかしく騒ぐだけで、儂らの言葉には見向きもしてくださらなかった!だからこそ、わしらはあのような形でしか。自分たちの存在を訴えられなくなってしまったのじゃ!ですが、今。このような形であってもわしらの存在を認知するに至った皆様方であれば。今一度、儂らの言葉に耳を傾けて共に同じ道を歩むことが出来るはずですじゃ…。かつて、ありし日のように…。わしらを知り、わしらを見て、わしらを理解して欲しいのですじゃ。」
鶴亀和尚は両手を上げて声を張り上げる。
「わしらはここにいる!今、ここで!ここで生きておる!わしらは生きたい!わしらは山や森で生きていたい!ただ、それだけなんじゃ!ただそれだけのことをしたいだけなのじゃ!わしらから、もう奪わないでくれ!森や山を残してくれ!ただ、それだけなんじゃ!」
カメラマンが機材の様子を見る。
「あれ!?おかしい!?」

他の者たちも慌ただしくなる。
「音響が乱れてる!?ノイズが!?」
「映像が途中から乱れてる!?」
「流れたのか?本当に!!」
予想外の事態で皆が混乱している。
そ、そんな馬鹿な。ここまでやったのに…
鶴亀和尚はその場にへたり込んだ。
「和尚!」
正吉が駆け寄り、鶴亀和尚を支える。
「な、なんだ」「これはいったい!?」
他の者たちが一斉に壁の方を指さす。
壁、と言うよりも空間に裂けめが現れる。
そして、裂け目がぱっくりと割れる。裂け目からは見るもおどろおどろしいとぎょろぎょろと辺りを見回す数多の目が覗いている。
「そ、そんな…。なんで、あんたが…。」
鶴亀和尚は１００年を生きた古狸。これの正体を知っている。
「妖怪である、あんたがなぜ…。なぜ、わしらの邪魔をするんじゃ!!」
数多の妖怪を取りまとめた。大妖怪。
「八雲紫!!」
鶴亀和尚に呼ばれたその者は、おぞましい空間から姿を現す。
「一古狸でしかないあなたの様な者の前に、私の様な大妖怪が姿を見せることなんて、まずないのだけど。今回は特別、あなた方の健闘を称えて姿を見せてあげましょう。」
多くのものが、その圧倒的妖気にあてられ気絶したり腰を抜かしている。
一木っ端妖怪でしかない自分だが、妖怪未満や妖怪もどきの他の変化者達ではあれとの会話は耐えられない。八雲と話すのは自分しかいない。
「なぜ、妖怪である貴女様が位階こそ違うのじゃが、同じ妖怪であるわしらの邪魔をするんじゃ。あ、あれはわしらの最期の…最後の希望じゃったのに!」

「あの放送が流れて、妖怪の存在が認められたら。私たちは困るの。」
「そ、そんな。わしらの計画が成功してこの国にわしらの居場所が出来れば。多くの妖怪が大手を振って生きられるはずじゃないですか!?」
「鶴亀和尚、あなたは人間の善性に期待しすぎている。多くの人間の構成要素は悪性よ。１００年以上昔の人間と今の人間は全く違うわ。５・６０年前の人間ならまだ、可能性はあったかもね。」
「くぅぅぅ…。そ、そんな、じゃが、じゃが…。」
「妖怪の存在が、現世に認められれば幻想郷の境界は乱れる。それに、現世に認められた妖怪は現世のルールに縛られる。それは妖怪本来の姿とは違うわ。それは認められないし、多くの妖怪は現世のルールに縛られることを認めないわ。」
「……。」
「もし、うまくいっても新たな問題が起こる。致命的ものがね。」
鶴亀和尚は八雲紫が言わんとすることも理解できた。
だが、理解したくなかった。理解してしまったがために思う。
幻想郷にいる大多数の妖怪のために、小であるわしらを犠牲にする。
解る。解りはするが…。
「……あんまりじゃ。この結末はあんまりじゃあ!!酷い、ひどい、ひどすぎる。救いはないのか?彼らに、わしらに救いはないのですか?」
鶴亀和尚は八雲紫の服の裾に縋りつく。
「和尚…。吸血鬼の小娘や諏訪の神々のしていることに、手も口も出さないのはせめてもの慈悲。理解なさい。」
鶴亀和尚はうつむいたままであったが、ちいさく「はい」と答えた。
「和尚。」
「正吉…。」
鶴亀和尚の周りに、他の者たちが集まってくる。
その様子を見て、八雲紫は鶴亀和尚に話しかける。
「そうね。特別にあなたたちに慈悲をあげるわ。今ここで、あなたた

ちを幻想郷に連れてってあげる。あなたたちを、ここに残すとまた面倒なことをしてくれそうだしね。」
「もし、拒否したら？」
　正吉が恐る恐る尋ねる。
「殺すわ。あなたたち皆…ね。来てくれるのなら、問題ないわ。そこの人間の方は、この日のことを忘れさせてあげる。サービスよ。どうする？」
　鶴亀和尚にとって苦渋の決断であった。
　己が敗北を認め、哀れな敗残兵として幻想郷へ渡るのは…。
　しかし、正吉の様な若い命を救うことが出来るなら…。
「わかったのじゃ。正吉…皆の衆…、このような結果となったのは非常に悔しいことであるが、ここに至っては打つ手はないのじゃ。くやしいが、くやしいがもうどうしようもない。正吉、すまなんだ。わしらは幻想郷に行こう。わしの勝手で、おぬしら若い命を散らすわけにはいかん。すまなんだ。」
「和尚…」
　鶴亀和尚と正吉たちは、義男たちのことを諦め、失意を持って幻想郷へと入っていくことにするのであった。

２２話　警視庁陥落、しかし

「我らの信念に基づき、由、壮絶なる玉砕を遂げるとも。愛すべき同胞たちを安住の地に送り届けんがため。人間たちに一矢報い、後に続くを信ずる!!」

権太率いる隊は地上部隊と共同し、落下傘空挺による警視庁・警察庁に対する制圧行動を開始。

制服私服の警官が、庁舎内を右往左往する。

「エレベーターを止めろ!!上につながる階段を封鎖しろ!!」

「総監、こちらへ!!」「あ、あぁ！」

「下は!?下はどうなってる!?」

警察庁からは火が昇り、警視庁庁舎の内外では銃声が響いていた。

警視庁・警察庁の玄関口では機動隊や警察特殊部隊や警官隊と妖怪変化が白兵戦と銃撃戦を繰り広げていた。

警察制圧部隊は、刀剣類や弓類、美術骨董レベルではあったが銃火器を所有し、変化者たちの中でも武装がしっかりしている者たちで構成されていた。

互いに、横転した乗用車や周辺店舗や企業の中から持ち出した物品類でバリケードを構築し、警察側はさらに防弾盾や機動隊車両で防壁を作り、攻防戦を繰り広げていた。

「建機隊前進!!」

警察庁・警視庁庁舎の地上部隊を指揮する竜太郎狐は、人間社会に暮らし、車両の運転ができる狐や化け猫達にブルドーザーやパワーショベルを前進させる。

ブルドーザーやパワーショベルを攻城櫓に見立てた攻城部隊が警

察側のバリケードを破壊しながら前進する。
無論警察側の抵抗は激しくなり、警察側も所内の押収武器である機関銃を持ち出し応戦する。妖獣側も、投入する建機を増やしたり、大型トラックによる特攻部隊を投入。
双方に甚大な被害を及ぼした。
警視庁正面玄関や各所の壁につっこんだ大型トラックや壁を剥がし始めるパワーショベルが、警察庁・警視庁の地上階層の陥落を物語っていた。
竜太郎率いる地上部隊が施設内に突入していく。
「突入!突入!警察を陥落させろ!!」

首相官邸
「総理、桜田門と連絡が取れません。警察庁・警視庁ともに…おそらくは…。現在は都庁より副総監が指示を出しています。また、他県の警察部隊による援軍が派遣されていますが、関東近郊でもこの援軍を狙ったかのように橋やトンネルの崩落、無人車両による踏切の封鎖が相次いでいます。」
「このような事態となっては、警察力での対処は不可能でしょう。」
「もう、自衛隊しかない…」
閣僚や官僚たちが口々に訴えるが、総理は首に縦にはふらなかった。
しかし、麹町警察署より官邸の死守が困難であることが伝えられる。
「麹町署の死守戦が破られた。ここに敵が押し寄せる可能性が出た。下手をすれば、警察庁は制圧された可能性が高い。他の公官庁も同様だ。」
総理は、今まで以上に神妙な顔をし続ける。
「もはや、自衛隊の出動しかない。治安出動だ。」
「総理?敵の正体がわかったのですか?」
官房長官は総理にこっそりと問いかける。

「畜生どもだ。畜生どものバケモンだ。」
「例のルートですか？」
官房長官は総理に近寄って、ひそひそと話し合う。
「あぁ、八雲様の方から連絡があった。」
「そうですか。この件は幻想郷の意志にあらず。と言うことですか？」
「あぁ。だから、これ以上の悪化はない。十分酷いことになったがな。だから、自衛隊を使うことで片付く。幻想郷が相手なら米軍に泣きつくしかなくなる。」
「とにかく。外の連中は自衛隊で片付ける。他国には外交上の妥協で観客席で大人しくしてもらうことにしよう。いいな。」
「はい。」

内閣総理大臣より自衛隊へ治安出動が下された。
東部方面隊第一師団より各駐屯地の部隊へ出動命令が下される。
習志野の駐屯地へも出動命令が出て、千葉県の治安出動に動いた。

治安出動、千葉県の戦線は崩壊。
成田三里塚の拠点では最期の時を迎えていた。
与吉狸は覚悟を決めて、側近たちと共に体にダイナマイトを括り付ける。
「これ以上は持ちこたえられん。最後に我らの意地をみせるぞ!!」
与吉達は自衛隊に特攻を仕掛ける。
この特攻で、自衛隊車両数台が炎上、自衛官数名が負傷した。
そして、成田を占拠していた妖獣たちは、習志野駐屯地の自衛隊精鋭の攻撃を受け全滅した。

埼玉県境を超えようとしていた久太郎狐たちは、大宮駐屯地の普通科連隊の攻撃を受け壊滅。
神奈川で騒ぎを起こしていた狸たちも、神奈川県警と武山駐屯地の部隊が鎮圧していた。

国会議事堂を攻め落としていた義男たちの上空を、陸上自衛隊ＯＨ―６Ｊヘリが義男たちの上空を通過する。
義男は側近の武彦と喜左衛門を呼び寄せる。
「武彦、喜左衛門、ご苦労であった…。同志たちには戦闘を中断させ、地下へ潜る様に指示を…。お主らも、身を隠すがいい。」
「いえ、自分は妻を亡くした時から、この命っ捨てる覚悟。最後までお供します。
「亡き刑部家の股肱の臣である自分は刑部家が滅びる時が我が死の日と、定めております。」
義男は空を見上げて、礼を述べる。
「すまんな、お前たち…。」